
ある国王の女装趣味に対する一考察

菩提樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある国王の女装趣味に対する一考察

【Nコード】

N3286J

【作者名】

菩提樹

【あらすじ】

女装趣味のある国王と、そんな国王に振り回されたり共感したりする周囲のばかばかしいお話。

ある貴族の女装趣味に対する一考察

長年、我慢していたがもうこれ以上、耐えるのは私の精神衛生上よろしくないと思われるので、洗いざらいぶちまけてやる。

ぶちまけると言っても、公の場での告発だとか暴露だとかではない。

そうしてやりたいのはやまやまだが、事はあまりにも馬鹿馬鹿しく、そのくせ壮大で当事者は無駄に重要人物、というよりこの国の最高権力者なのだ。

こう書くと、何やら私が重大な秘密を掴んでいて、少しでもそれを洩らせば抹殺されかねないことを恐れているように思われるかもしれないが、それは違う。断じて違う。

そうだったらどれほど良かったか。

今現在、他人の秘密を知ったばかりに身の危険を感じている連中には大変申し訳ないが、私に言わせれば、秘密を握られて慌てふためく可愛げがあるだけ、まだましである。

「命が惜しければこのことは誰にも言わない」

「わかりました」

私と奴……いや、私とあの方の間でこんな会話は間違っても成立するまい。

正しくはこうだ。

「言いたければ言えば？」

「絶対に言いません」

「そこまで内緒にすることじゃないのに」

「内緒にすることです！あなたには恥も外聞もないのですか！」

「それって、答えが必要なのか？」

ああ、思い出すだけでも頭痛がしてくる。

ちなみにこれは朝の会議前の会話である。今朝だけではなく、ほぼ毎日のように私と陛下の間で交わされる恒例行事となっている。

出発点も着地点も変わらない会話に何の意味があるのかと思われるだろう。私も同感だ。

しかしわかっていても言わなければならない、言わずにはいられないことが人にはあるのだ。たとえその相手が、百回言ってもわからない馬鹿であったとしても　これは不敬罪にあたるかもしれない。後で削除しなくては。

なぜ、私が延々とこんなことを書いているかというと　積年の鬱屈が爆発しかねないから、と言ったら些か唐突だろうか。

実際、ここまで三十行近く、私は核心に触れることを避けて避けていた。

おそらく好奇心でこの手帳を開いた者はとくに退屈して投げ出してしまっているだろう。それはそれで結構なことだ。暴露してやる、と息巻いたものの、私としても暇人どもの暇潰しのためだけに恥をかくのは忍びない。

とはいえ、こうして詳細を書き残すことを決心するまでには長く、馬鹿馬鹿しい葛藤があった。

今も迷っている。ずばり言うてしまうにはもう少しかかりそうだが仕方がないので、私がそもそもこんな文章を書きはじめたきっかけを先にお話ししよう。

私、ルードヴィヒ・フォン・フレイザーは高貴なる家の生まれである。バルトライヤ王国初代国王陛下の代から、代々王家に忠誠をもってお仕えしてきた一族フレイザー家の、長男として生を享けたのはかれこれ二十六年前のことだ。

以来、紆余曲折を経て当代の国王陛下にお仕えするようになったのが十一年前、公的な役職を頂いたのが五年前のことである。

現在の私の肩書は宰相補佐だ。

若輩の身でこのような高い地位を得られたのはひとえにたゆまぬ

努力のおかげ、ではなく、陛下の強権発動によるところが大きいだろう。

陛下が即位されたのも丁度五年前のことであり、突然の即位の不安からよく知った者を側に置こうとされたのだろう、と周囲も私も思っていた。

結論から言えば、それは大きな間違いだった。

が、今はその話は置いておこう。

ここで重要なことは、私が陛下にお仕えした年数が約十一年に上る、ということだ。

十一年。

ストレスが蓄積するには十分な時間ではないか。

最近の胃痛、肩こり、倦怠感の原因が陛下であることを、私は信じて疑わない。

そのことを陛下の前でうつかり口にしてしまったのが三日前。その場で医師の診察を受けることを命じられ、受けるまでは陛下の御前に上がることを禁じられた。診察を受けなければ陛下と顔を合わせなくてもいいのか？と思いきや幸いと政務に励んだまではよかったが、目の前に心配の種がないということであらぬ想像が掻き立てられ、いてもたってもいられずに王宮典医殿を訪ねたのが昨日のことである。

どう低く見積もっても推定年齢は八十歳以上と思われる典医殿が、もごもごとほとんど歯の無い口を動かしながら下した診断は「単なるストレス」だった。

予想していたことなので、驚きはない。

むしろなんらかの病に罹っているよりも、ストレス性の肩こりの方が余程ましというものである。

しかしせっかく典医殿がいるのだから、何か改善策はないかと訊ねてみると、

「ストレスの原因を取り除くことだな」

と、何とも素晴らしい答えが返って来た。

それができれば苦労はしない。

私の仏頂面に気づいたのか、典医殿は苦笑いした。

陛下を診察することもある典医殿は、当然、私のストレスの原因にも思い当たっているはずである。

「まあ、なんだ。早まるでないぞ」

「どういう意味です」

「お前さんがある日突然、陛下を暗殺した罪で逮捕されてもわしは驚かん。そういう顔をしておる」

「どういう顔だ。」

「やはり典医殿も、あれはおかしいと思っているのですね」

「それはまあ、な……誰が見てもおかしいだろう、あれは」

「陛下と話していると、おかしいのは私の方なのではないかと思えてきて、恐ろしいですよ」

「……お前さん、相当疲れておるな」

「ええ……やはりおかしいですよね。男性が、女装をして喜ぶなんて」

「……」

「……」

「……知っておるか？」

「何をです」

「陛下が今度、舞踏会を開かれるらしい」

「何か問題か？」

「と言いつつ、脳内では既に警鐘が鳴っている。」

悲しいことに、こと陛下に関する事でこの予感が外れたことはない。

そしてそれは、この時もそうだった。

「陛下……」

「あら、ルデイ。どうしたの？そんな怖い顔して」

執務室には陛下しかいなかった。常と変らぬ麗しき容貌が、天使のごとき微笑を浮かべて私を見るが、今更そんなものに騙される私ではない。

なぜなら陛下は、このどこからどう見ても貴婦人にしか見えない陛下は、真正正銘の男なのだ。

国王としてはルシアス三世で通っているが、本人は絶世の美女ルシアを名乗っている。

いつそのこと私も、陛下が女性であると今からでも思いこみたいぐらいである。その方がお互いに幸せだったのかもしれない、とすら考えることがある。

「陛下……正直にお答えください。舞踏会を開くというのは、本当ですか？」

「あら。誰から聞いたの？ルデイには内緒にしておいてって言ったのに、口の軽い人もいるものね」

「そんなことはどうでもよろしい。本当なのですね？」

「ええ、本当よ」

「ではその舞踏会が、全員女装必須というのは本当ですか？」

「ええ」

「……出席が強制というのは？」

「当然でしょう」

何の迷いもなく陛下が言い切る。

何がどう、当然だというのか。激しく問い詰めたい衝動に駆られるが、ここで自分を見失うようでは陛下に丸めこまれるのがおちである。

「なぜ、そのような愚挙に及ばれたのかお聞きしても？」

「愚挙って……」

陛下は苦笑する。

「ねえ、ルデイ。私、考えたのよ」

「考えたとは？」

「私は間違っていたわ」

やっとわかったか、と安堵しかけるが、その「間違っていた」が私の思う意味とは違うからこそ全員に女装強制などと言い始めるのである。

危ない。気をしっかり持たなくては。

「私はずっと、女であることを心がけて、努力してきたわ。美しい姿、優雅な仕草、女としての心構えとは何か。考え過ぎて、夜も眠れなくなるくらいにね」

「そんなことで」

「ルデイ、お前から見て、私ってどう？どこか女として、不自然な所ってあるかしら？」

「男性なのに、ご婦人の格好をされている点が甚だしく不自然です」
「もう！そんなことはどうでもいいのよ」

どうでもいいのか。

「まあ、お前に聞いたのが間違いよね。本当は褒め称えたいのに、内心の先入観が正直な意思の発露を拒むなんて、よくあることだわ」
「いえ、私はこの上なく正直に」

「大丈夫。お前が本当に言いたいことはわかってるわ。私の美しさに怖れおののいているのでしょうか？その気持ちは有難くもらっておくわ。でもね、それだけじゃ駄目なのよ」

ばん、と陛下が机に両手を叩きつける。

その勢いに思わず後ずさりしそうになり、危うく踏みとどまる。

なぜ、私が気圧されなくてはならないのか。陛下の女装にかける熱意が、私の常識を上回っているともいうのか。

「だ、駄目とは？」

「全然、駄目よ。確かに私は、高みに上ったわ。けれどこの間、ふと思ったの。私だけが美しくなるのは間違いじゃないかって」

「…どういう意味でしょう？」

「自分だけが美しくなったとしても、それは所詮自己満足じゃなくて？私は特別なよ、と一人で悦に入ったところで、周りの者たち

がその素晴らしさを理解していなければ、価値も半減よ。美しくなる喜びを他者に伝えてこそ、真に美の求道者として堂々と名乗りを上げられるというもののよ」

私は眉間を押さえた。

「陛下……陛下は求道者ではなく、国王です。第一、美を伝えたいと言われるなら、女性に伝えるのが筋というものでしょう。なぜあえて男性に、なのですか」

「わかってないわね、ルディ」

なぜか陛下が得意気に鼻を鳴らす。

「女性というものはね、言われなくても自ら美しくなろうとするものよ。これは本能よ！私を見て頂戴！わかるでしょう？」

わかるわけがない。

「一方で、男は何？美を作りあげる努力をしようとししないで、つまりその価値をわかりもしないで、結婚するなら美人がいいなんてほざいているのよ？だから私は彼らに機会を与えようと思ったの。自らが美しくなろうと努力する過程で、美の素晴らしさ崇高さをあやまたず理解して欲しいのよ」

私には全く理解不能の自論を語り終えて、陛下は満足げな顔をする。

……本当に、どうしてくれようか。この阿呆。

こんな中でも一応国王であり、それに相応しい権力も持っている。本気で勅命でも出せば、最終的に逆らい切れないことは目に見えている。こんな馬鹿げたことで勅命を使うわけがないだろうという期待は、陛下に限っては裏切られること前提で考えなければならぬ。

以前、陛下がドレスを新調した時など酷いものだった。

その悪趣味さと金額の凄まじさといったら、本物の王妃や女王も卒倒ものだったろう。財務官から泣きつかれて事前に書類を抹殺したまではよかったが、あるうことが陛下は勅命で自分の衣装に関する特別予算枠を設けようとする始末だ。

その時は何とか思いとどまらせたが、今回も下手に刺激しては何

をするかわかったものではない。

私は策を練るためひとまず退出した。

そして今に至るまで何の解決策も浮かんでいない。

一人、陛下をお止めすることのできる人物に心当たりはあるのだが、いかんせん陛下の命に関わるかもしれないと思うと決断できない。私もまだまだ甘い。

今のところ、その方のお名前を出して牽制しているが、相手はあの陛下だ。いつまでもつことが。

最終手段として拉致監禁も考慮に入れねばなるまい。

この手帳は嚴重に保管しておくことにしよう。

ストレス発散のために今後も使えそうだ。思っていることを率直に書き残すだけで、これほど心が軽くなるとは知らなかった。読み返して、微妙な気持ちになることはなるが……。

もし陛下に耐えきれなくなったら、これを持って隣国にでも亡命することしよう。

専属侍女の日記

四月十日

来週から国王陛下にお仕えすることになった。正直憂鬱だ。

なぜって、ルクレツィア様を放って別の方にお仕えするなんて今まで考えたこともなかったし、しかもそれを当のルクレツィア様本人から申し渡されるなんて思いもしなかったからだ。

青天の霹靂って多分、こういうことを言うのね。

ルクレツィア様は公爵令嬢で、陛下とも仲がよらしい。それで何かの折に私の話をされたら、陛下が是非とも私をと所望されたらしい。

……一体、なぜ？

自慢ではないが、陛下のお目に留まるような能力は持っていない。仕事に手は抜かない自信はあっても、何か抜きんでた特技を持っているわけではないのに。容色だって、平々凡々。陛下が興味を引かれるような人間ではないと思うのだけれど。

私が自慢できることと言ったら、お化粧の腕前くらいのものだ。

これだけは、誰にも負けない自信はある。

公の場では絶対に言えないけれど、国内一の美女と褒められるルクレツィア様のお顔だって、私の技術と情熱の結晶なのだ。

ルクレツィア様をお美しくするために侍女をやっていると云っても、過言ではない。

何と言っても、彼女は私の芸術家魂を刺激する稀なる素材なのだ。その素材をみすみす捨てて、殿方のむさ苦しいお顔を毎日拝見しなければいけないなんて、私が何をしたと言うのかしら。

大体（以下、まだ見ぬ国王に対する妄想が続くため削除）

四月十三日

嫌々ながらもルクレツィア様の美貌を保つため、私の培ってきた技術を同僚に伝授した。勿論、たかが一週間で伝えられるほど浅いものでもないけれど、ルクレツィア様のことが好きだから仕方がない。

侍女ごときがこんなことを言うのもおこがましいけれど、私はルクレツィア様のことを妹のように思っているのだ。

なんて言っと、大抵の人にはおかしい顔をされる。

私が童顔で、ルクレツィア様は妖艶な美女だから私の方が年下に見えるらしい。

それにルクレツィア様の性格は妹と言うより姉と言ったほうがしっくりくる。表面上は。

アリーセは私に代わって、我侭と評判のルクレツィア様にお仕えしなくてはいけないのが不安らしく、終始ぐちぐちと泣き言を吐きまくっていたのでとても鬱陶しかった。口より手を動かさなさい。

私だって黄色がかった緑と黄緑の違いもわからない人間に姫様を任せるのは断腸の思いなのよ、と口走ったら泣かせてしまった。

私が泣き虫の女とけちな男を嫌いだと知ってのことなのかしら。多分知らなかったんでしょうね。教えてあげたら泣きやんだのでよしとしよう。

こんなことではルクレツィア様がすぐに癩癩を起こすのは目に見えているのに、何を考えているのかしら、陛下ったら。

四月十六日

今日でルクレツィア様ともお別れだ。

けれど当の姫様はとても機嫌がよろしいようだった。私と別れるのが嬉しいからではなく、夜会で思い人に会えるのが楽しみで仕方がないらしい。単純な方だ。おそらく私が今日で最後ということも忘れていらっしやるのでしようけれど、それはそれで姫様らしくていいかもしれない。

腕によりをかけて、今までで一番美しくしてさしあげた。

心残りには姫様の恋の行方をお側で見守れないということだ。

姫様は、相手のことが好きであればあるほど本心と逆のことを喧嘩腰で口にされるという特技をお持ちなので、見ていて面白…いえ、心配なのだ。

相手の方は一見、冷たそうに見えても意識的にか無意識的にか、姫様を上手く転がしているのでまあ、大丈夫だとは思っただけけれど。

（以下、追記）

姫様を送り出して、ベッドに入っていたら真夜中になって叩き起こされた。

私の安眠を妨害した張本人は、夜会におられるはずのルクレツィア様だった。

何事かと思っていたら、突然私に抱きついて号泣されたのには吃驚した。曰く、明日になったら私が陛下付きになることを夜会で思い出したらしく、慌てて戻って来たらしい。泣いているのは、それを今の今まで忘れていた罪悪感のせいだとか。

ちなみにそれを説明してくださったのは姫様の思い人である。表情があまり変わらない方なので彼がどう思っているのかわからなかったのだけれど、夜会を途中で抜け出すのは無礼ではないのだろうか。

だって今夜は陛下が即位されて初めての夜会だ。

お互いに顔見せ・忠誠を示すような意味もあるのでは？

姫様は後先考えないところがあるので多分そんなこと思いつきもしなかったのでしょうけれど、彼はそうでもないだろう。

それをおそろおそろ申し上げてみると、「その無礼はお前が働いて返すことになっている」とのお言葉が返って来た。

私が陛下に誠心誠意お仕えすると約束すれば、今回の姫様の無礼はなかったことにしてくださるらしい。

……そんなことでいいのかしら？

私に出来ることなどたかが知れているというのに、陛下は過大評価だと思えて仕方がない。

思わずそう呟くと「すぐわかる」と姫様の思い人が苦々しい顔をされたので、それ以上に何かを申し上げるのはやめておいた。

四月十七日

今日は陛下にお目にかかった。

何と云うか、個性的な方だった。即位されたのが一か月前で、ルクレツィア様の侍女である私には今までお目にかかる機会がなかったのだけれど、噂だけはいろいろと耳にしていたから、実際にお会いする前から先入観に凝り固まっていたにもかかわらず、そんなものも吹き飛ぶほど強い印象を受けた。

陛下は、とても美しい方だった。

緩やかな金髪と目の覚めるような青い瞳がまるで絵画から抜け出てきた天使のようで、後光まで射していらした。まあ、その光は窓から差し込んできた朝日だったのだけれど。

朝に弱い姫様とは違って、陛下は早朝から爽やかな微笑を浮かべて私を出迎えて下さった。

こちらまで嬉しくなってしまうような笑顔は、天使様というよりも人懐っこい子供のようで、警戒心を薄れさせてしまうには十分だ

った。私も思わず見とれてしまっただろう　陛下が、女性用の衣装をお召しでなかったら。

私の脳裏にはある噂がよぎった。即ち、国王陛下は少し頭がおかしいらしい、という噂が。

どうおかしいのかと言うとそれには色々な説があつてとてもここには並べきれない。例えば、自分が女だと思い込んでいるとか、男性を集めて侍らせているとか、女性の格好をして女王様ごっこをするのが好きだとか。

もしかして最後のが正解なのかしら？と一瞬思つてしまつてすみません、陛下。前の二つもありうるかもしれないとも思いました。申し開きをさせていただけるなら、それまで陛下のお姿を目にしたことがなかったせいだ。

ルシアス様は、先代国王陛下の異母弟であらせられながらも、即位されるまで表舞台に出てこられなかった。

これだけの美貌の持ち主なのに、不思議な話だ。きっと、女装趣味のせいでしょうね。

そんなことを思っていると、陛下はなんと私の両手をお取りになった。仮にも一国の国王陛下が、侍女の手を、だ。

呆然としている私に追い打ちをかけるように、陛下は満面の笑みでこう仰った。

「貴女に会えて嬉しいわ。ずっと待つていたのよ」
固まつてしまった私を誰が責められるだろうか。

まさか本当に陛下は私を？なんて妄想すら二秒ほど浮かんだ。

陛下はそんな私に気づいているのかいないのか、続けてこう言われた。

「ルクレツィアから貴女の話聞いて、ずっと会いたいと思つていたの。ルディからは止められたけど、押し切っちゃった」

「こ、光荣です」

「光荣なのは私の方よ。バルトライヤーの美女の専属侍女を手に入れたんだから」

「は？」

ぐぐ、と陛下の手に力が込められる。

「貴女の手にかかればどんな顔でも絶世の美女になれるって、ルクレツィアが太鼓判を押したのよ？我儘で口が悪くて無駄に上から目線で滅多に人を褒めない、あのルクレツィアがよ？これはもう私に美しくなれと神が後押しをしているんじゃないでしょうか？そうでしょう？」

「あ、あの陛下」

「なあに？」

と、覗き込んでくる陛下は、ドレスを着て女性のような言葉づかいをしていても、やはり男性にしか見えなかった。

もともと綺麗な顔立ちをしていらっしやるから見苦しくはないけれど、やはり骨格や何かで性別はわかってしまう。しかし間近でその顔を拝見した限りでは、素質はあると思われた。私の腕前をもつてすれば、陛下を女性のように見せかけることも可能かもしれない。

気づいた時には、私は動揺していたことも忘れて陛下の手を握り返していた。

「本当に、私の腕を必要とされていますか？」

「勿論よ」

私が乗り気になったことを察せられたのか、陛下の目に熱意が灯る。

「世界広しといえども、私以上に貴女を必要としている人間はいないわ。共に歩みましょう。同じ目的のために！」

「はい、陛下！」

誰か他の人間が居れば、呆れて止めただろう。

自分でも何かが憑いていたとしか思えない心理状態だった。けれど私にとっては、私の腕を必要としてくれることは私という人間を認めてもらえることと同義だった。しかも、腕を振るう対象が男性だなんて、職人魂を刺激されても仕方がないでしょう？

私の腕が本物なら、性別なんて些細な問題、いえ、問題にすらならないはず。

結局のところ、自尊心がくすぐられてしまったのよね。この陛下を女性に仕立て上げられるのは私だけ、なんて思い上がりもいいところだけれど。

そういうわけで、私は陛下の専属侍女となった。

ある国王の天敵とはいかなる人物か

陛下が失踪された。

それはいい。いや、よくはないが、いるよりはいいと思うしかない。何しろ、例の「全員強制女装舞踏会」は未だに取り消されていない。貴族連中は当然、そんなものに出席したがるわけもなし、かといって陛下の望みとあらば無碍に断るわけにもいかないということとで、毎日のように私に文句を言ってくる。陛下は陛下で、顔を合わせるたびにドレスのデザインがどうの化粧の段取りがどうのと頭がおかしいとしか思えないことを矢継ぎ早に捲し立て、私の心労を増やす手伝いに余念がなかった。

その陛下が、今度は失踪だ。

ご丁寧に、置き手紙まで残して。

『私の主張が理解されないことにはとても傷つきました。しかしそれも私の修行が足りないせいでしょう。皆を説得するにはどうすればいいか、最善の方法を見つけるために旅に出ます。探さないでください』

手元の、しわくちやの紙に目を落として私は眉間を押さえた。

ちなみに、しわくちやなのは私が一度握り潰してしまったからである。何が悲しくて、こんな手紙を二度も三度も読み返さなくてはならないのか。

「陛下は、何か言っていたか」

「いえ、特には」

手紙を発見した侍女は、俯いて震えている。笑っているのだ。咎めるべきなのかもしれないが、そんな気力も湧いてこない。

「お前が最後に陛下に会ったのはいつだ？」

「早朝に、お化粧のためにお会いしました」

「……その時、何か変わった様子は？」

「いいえ。いつも通りです。『今日もお綺麗ですわ』と申し上げたら、『これでルディもいちころね』と嬉しそうに仰られて高笑いされておられました」

「……それは、いつも通りだな」

不本意ながら、似たような現場は何度が目撃したことがある。

「行き先に心当たりは？」

「まあ閣下。私が知っているわけはありませんわ」

「そうだな……」

「でもハンバート様なら何かご存知かもしれません」

「あいつか」

侍女のあげた名に舌打ちする。

ブラジミール・ハンバートは陛下の使っている間諜だが、元は隣国に与していたといういわくつきの男である。

そんな男を、陛下はどんな手を使ってか自分の部下に引き抜いてしまった。

ハンバートの知らないことは誰も知らない、と言われるほど何でも知っている男だ。陛下の逃走先の十や二十、苦もなく答えられるだろう。

しかし私としては陛下と並んで大いに関わりたくない男でもある。なぜかといえば……いや、よそう。素面で書くにはあまりにもおぞましい話だ。

「すまないが、呼んで来てくれ」

「かしこまりました」

有能な侍女が、迅速に行動するべく退出しようとした矢先、向こう側から勢いよく扉が開いた。

それに衝突して侍女はしたたかに鼻をぶつけたが、彼女を気遣う余裕は私になかった。こんなふうに扉を蹴破るような勢いで開ける人間は、私の知る限り一人しかいない。

案の定、扉の向こうから姿を現したのはエーファ・フォン・ベルハウゼン様その人であった。

エーファ様は私を視界に捉えると同時に、にやりと肉食獣のような笑みを浮かべた。

「久しいな、フレイザーの倅」

断わっておくが、エーファ様は女性である。

それどころか先々代の陛下の妹君、つまり陛下の叔母上にあたる貴い方だ。現在はベルハウゼン公爵家に降嫁されたが、それ以前は王族ながら騎士団を率いる歴戦の戦士として名高かった。

彼女の軍の通った後には草一本残らず、敵軍は彼女の名を聞いただけで逃げだしたという伝説まで残っている。

当時、幼かった私にはその話が事実かどうか断言はできないが、少なくとも「本当かも知れない」と思わせる迫力が、エーファ様には備わっていた。

何しろ、陛下が唯一、頭の上がない方である。

ああ見えて陛下も相当な剣術の使い手なのだが、エーファ様はそれを凌駕する天才だ。化け物と言ってもいい。

武力を背景に陛下を脅すエーファ様の図は、陛下にお仕える私としては見慣れた光景である。

もっともここしばらくはベルハウゼン領に引きこもっていらしてお姿を見かけることもなかったのだが。

「お久しぶりです、エーファ様。なぜ、ここに？」

「なに、里帰りだ。気にするな。少々、面白い噂を耳にしてな」

「面白い噂？」

「ああ。何やら我が甥が女装舞踏会を開催するらしいと聞いてな。

前にあれほど言ったのに、未だに馬鹿な振る舞いをやめないのは叔母として嘆かわしい限りだ。だから可愛い甥のために、教育的指導をくれてやりに来たのさ。盗賊討伐にも飽きてきたしな」

暇潰しに討伐される盗賊が気の毒だ。いや、法を犯す者たちに同情する必要もないのだが。

「お越しになられるのは構いませんが、連絡くらいしてもらえませんか。これで私も多忙な身ですのぞ」

「気付ったことを言うな。ほとんどルシアスの尻拭い係だろう、お前は」

エーファ様がにやにやと笑う。公爵夫人と言うより、居酒屋の酔っ払いのような笑みだ。

「それに私だつて連絡ぐらいした。宰相にな。だがさつき挨拶に行ったら、花粉症が酷くて早退したと言われてな。ルシアスの姿も見えん。きっと私を恐れて逃げたんだろう。軟弱な奴だ。まあ、危機察知能力は優れていると言えるがな」

私は手にしたままの手紙を、もう一度握り潰した。

女装に対する理解を得られなくて傷ついた、などというふざけた理由を信じたわけではなかったが、なんのことはない。エーファ様が来られることを察知して逃げたのだ。うっかりそれを陛下に教えたのは宰相だろう。責任追及を恐れて仮病を使っているに違いない。そして陛下の搜索も、陛下が見つかった場合にエーファ様を宥めるのも、私がやらなくてはならないのだ。

疲労感にぐったりしていると、エーファ様が同情するような顔をする。

「お前も大変だな。我が甥ながら、誰に似たのか……あれの兄が生きていた時は、まあまともに見えたのだが」

「まとも……ですか」

確かに先代国王陛下　陛下の兄上が生きておられた時は、陛下は女装などしていなかった。それどころか、男らしい顔立ちとがっしりした体格の先代陛下に憧れて、エーファ様に剣術を習いたいと無謀な申し出すらしたくらいだ。私から見ても、先代陛下は有能でおまけに人格も非常に良かった。陛下が懐くのも理解できるし、その頃は陛下にもまだ可愛げがあったことも否定しない。

だが、しかし。

無断で市井に遊びに出掛けたり、手持ちの金が尽きて娼館から帰してもらえなくなったり、拳句に勝手に私の名前を名乗って借金を肩代わりさせようとしていた陛下がまともなんてことは、絶対にな

い。

とはいえエーファ様は私の暗い過去になど興味はないようで、うきうきと拳を鳴らしている。

「まあ私に任せておけ。相手は所詮、あの馬鹿甥だ。ルシアスの一匹や二匹、すぐにいぶり出してやる。まずは」

そこでエーファ様の目つきが変わった。

たとして言うならば猪が虎になったような劇的な変化だ。

「その鼠を血祭りに上げてやろう！」

ふん！と気合の声と共に、どこから取り出したのか、エーファ様が短剣を投げつける。短剣は何もない壁に刺さったが、「わあ」と間の抜けた声が響き、第三者の存在を証明した。

エーファ様はつかつかとその短剣の刺さった場所に歩み寄り、なんとその壁を引き戸のように開いて、中から男を引っ張り出した。

隠し部屋のようなものだろうか。確かに王宮にはあちこちにそういうものもあるが、自分の執務室にもあったとは知らなかった。

だがそれに驚いている暇はなかった。なぜなら引っ張り出された男は、少し前に呼び出そうとしていた諜報員　ブラジミール・ハンバート本人だったのだ。

ひよろりとした痩せた体型とぼさぼさの髪以外に、特徴らしき特徴の無いハンバートは、エーファ様によって床に転がされ「いてて」と呑気な声を上げた。

そして次に発した言葉が

「酷いじゃないか、おばさん！」
である。

私は確信した。この男の死を。

案の定、手加減なしでエーファ様に殴られて悶絶することになった。エーファ様はそれだけではおばさん呼ばわりが許せなかったのか、愛用の長剣を躊躇いもなくハンバートの喉元に突きつける。ハンバートが異常にのけぞっているところを見ると、突きつけると言うよりも押しつけているのだろう。

「いたたたた、いた、痛いってばおばさん。もつと優しくしてよ」
「黙れ。貴様この私を二度もおばさん呼ばわりするとは、生きて帰れると思うなよ」

「いえ、それはどうでもいいのですが盗み聞きしていたわけを」
聞いて下さい、と続けようとするもエーファ様の眼光の鋭さに口を噤む。

「どうでもいいとはなんだ、どうでもいいとは！このようなどこの馬の骨とも知れぬ男に、この私が『おばさん』呼ばわりされたのだぞ！このような無礼を許しては王国の威信に傷がつきかねん！ただちに処刑するべきだ」

熱弁にもほどがある。

私としてはハンバートが処刑されることには諸手をあげて賛成したいところだが、陛下の行方を捜すためには必要な男だ　非常に残念ながら。

「エーファ様の仰ることもごもつともですが、この男はこれでも腕利きの諜報です。陛下を捕まえるために大いに役に立つでしょう」

「むう、そうなのか……仕方ない。大事の前には私情を殺すことも必要だからな。おい、貴様。聞いていたな？命が惜しければ私に協力しろ」

「ええー……僕これでも王様の部下なんだけど」

「ふん。それでこそそと盗み聞きか。ルシアスに見張っているとでも言われたか？だが我が甥は失踪中だからな。お前を扱き使おうが不敬罪で処刑しようが、文句は言えん。わかるか？ここにはお前と私しかいない。何をしようが、全ては闇の中だ」

私が黙っていること前提なのか。

しかしハンバートはエーファ様の脅しにも屈しなかった。それどころか、間の抜けた笑みで「そんな脅しに僕が降伏するとも思ってるの、おばさん」と言い放った。

「僕は王様を裏切らないよ、絶対にね」

「ほう。言うではないか。まがりなりにも臣下としての忠誠心はあ

るということか」

「そんなんじゃないよ。王様はね、僕が一番欲しいものをくれるって約束してくれたんだ。だから、僕も王様のことは裏切らない。そういう約束だからね」

「欲しいものだと？」

エーファ様は興味深げな顔をし、私は眉間に皺を寄せた。その「欲しいもの」が何なのか、私はよく知っていたのだ。

私の心中など知る由もないエーファ様は、嬉々として言葉を重ねる。

「それは面白い。言ってみろ。買収が可能な相手は大歓迎だ。体に聞いてもいいが、手間がかかるからな」

「うーん、そんな大したものじゃないんだけどね……女の子」

「何？」

「だから、女の子だよ。僕が欲しいもの」

「女の子……だと？それは女が抱きたいということか？」

「違う違う。何聞いてたのさおばさん。よく聞いてよ。僕はね、成人する前の女の子にしか興味ないの。より細かく条件を言えば十二歳から十五歳の色白の子がいいなあ。あ、でもあんまり肉付きがいいのは嫌だね。胸やお尻は程良く未発達で、ちよつと節ばった感じの体つきが好み。小さめの服を無理やり着てれば尚良しなんだけど狙ってやってるんじゃないかって自然にそうなってないと燃えな」

私はハンバートを殴り倒した。

エーファ様は咄嗟に反応できず、目を白黒させている。

「……それは、あれなのか。犯罪ではないのか……？」

「あ、失礼だなあ。そりゃー全く清い関係じゃあないけどさー双方合意の上だよ？それに本番までは滅多にいかないし？まあ大抵は手を握ったりキスしたり舐めたり啞えられたりで満足」

「もういい、貴様の言いたいことはわかった。作戦会議を行う。暫しそこで待て」

と言つて、エーファ様は私に手招きする。

ハンバートから少し離れたところで声を潜め、

「物は相談だが」

「お断りします」

「…まだ何も言っていないぞ」

「言われなくてもわかります。いいですか、私は娘をあの様な変態に差し出すつもりはありませんからね」

「人聞きが悪い。目的のための尊い犠牲だ」

「犠牲ということは認めるんですね」

「ただ一緒に遊ぶだけという条件をつければ問題あるまい」

「問題あります。第一、娘はまだ二歳ですよ。あの変態の好みにも一致しません」

「だが母親はバルトライヤーの美女だぞ。希少価値はあるだろう。将来性に期待ということだ」

「あの変態に目をつけられたらどうするんですか！とにかく私は断固として断ります。娘を変態に捧げるくらいなら陛下の一人や二人野垂れ死にしようが行方不明になるうが大いに結構です」

「交渉決裂か…」

エーファ様は何やら苦々しげな顔をしつつ、ハンバートの元に歩み寄る。そして言った。

「おい、貴様。心して聞け。特殊な趣味を持つ貴様のために、我が娘と交流することを許可してやる。その代りに、明日までに甥を捕縛しろ。いいな？」

「公爵様の娘かあー。確かに毛色が変わってていいかもね」

「ただし」

と、気味の悪い笑みを浮かべるハンバートに、エーファ様が指を突きつける。

「あくまでも『交流』するのみだ。手を握ったりキスしたり舐めたり啜えさせたりは一切認めん」

「ええーその何が楽しいのさ」

「黙れ。貴様も変態の端くれなら、どんな困難な状況でもそれなり

に快楽を感じてみせる」

大真面目な顔で意味不明なことをエーファ様が言う。

その意味不明な言葉は、なぜかハンバートの琴線に触れたらしく、奴は挑戦的な顔つきでエーファ様を見上げた。

「へえ。言うね、おばさん。そこまで言われたら本気出さないわけにはいかないよね」

「ふん。好きにしる。私は娘の自主性を尊重しているからな。娘が本気でお前の趣味に付き合ってもいいと言うなら文句は言わんさ。ただし少しでも無理強いしたら、貴様のナニを切り落として犬に食わせてやるから覚悟しておけ」

勝手に変態と交友関係を結んでおいて自主性も何もない。

私はエーファ様の息女に同情を禁じ得なかったが、私の力では娘を守るだけで精一杯である。聞くところによればベルハウゼン公爵令嬢は令嬢らしからぬ剣技の持ち主だという。そうそう変態の思うどおりになるような娘ではないだろう。何しろエーファ様のご息女だ。誤って変態を不能にでもしてくだされば尚良し、そうなれば将来的に私の娘の身の安全も保障されていいこと尽くめである。

私が僅かな希望に思いを馳せているうちに、エーファ様とハンバートの話は決着がついたようだった。

急にやる気に満ちてきびきびと出ていくハンバートを見送りながら、これでいいのかと自問するも私では陛下の思考を読み切れない以上、仕方のないことなのだろう。目には目を、変態には変態を、だ。

「これで万事上手くいくな」

傍らで至極満足そうにエーファ様が腕組みをする。

上手くいってもらわねば困る。おそらく陛下は女装のまま街中におられるだろう。恥という概念が欠如している上に、残念ながら思慮も浅い。

あれが自国の国王であると国民が知ったら、革命が起きるかもしれない。

だが想像すると頭が痛くなるので、私はひとまずそのことを全て頭から追いやり、深く溜息をつくしかなかった。

ある国王と護衛騎士の逃避行 1

今日は厄日だ。

薄々、俺って厄病神にとりつかれてるんじゃない？とは思ってたが、今日はそれを再確認したね。

つか、仮にも国王が臣下に向かって「私を連れて逃げて」とか言うんじえねえよ。お断りだ。お前の護衛騎士になっちまっただけでこっちは超迷惑だったのに、この上ホモの誘拐犯になれってか。これ以上変態が増えたらルドヴィヒが発狂するぞ。

声に出してはつきり言っちゃったってのにルシアスは堪えなかった。

「酷い！！ヴェンツェルは私に死なっというの！？叔母様に見つかったらどんな仕打ちを受けるかわかってるでしょ！？」

「なんであの人が出てくるんだよ」

「宰相から聞き出したのよ。叔母様が私の企画を耳にしたらしくて、今日にも王城に来るんですって！早く逃げなくっちゃ！！」

「一人で逃げるよ」

「置き手紙は残してきたし、脱出経路はハンバートが確保したわ。早く行きましょう」

「一人で行けつつってるだろうがっ」

本当に人の話を聞かない奴だな。耳ついてんのか。

「お前、それでも私の護衛騎士なの？主の危機に知らんぷりなんて恥を知りなさい、恥を」

「お前が言っな！」

「そんなこと言って、後悔しても知らないわよ」

「するかよ」

「どうかしらね。もし私を連れて行ってくれないなら お前に襲われたって言うわよ」

「はあ!？」

「私は仕えるべき主。身分を越えられないのに想いだけは募ってついに……ああ、私って罪な女」

「……」

「で、どうするの？」

ふざけやがって。世界中で人間がこいつしかいなくなつたつてお断りだつてわかつて言つてんのか、この馬鹿は。こいつの言うことなんか信じる阿呆はいまい。そうだ。俺は正々堂々としていればいいのだ。

誰が行くか。

「あの子はどう思つかしら？ほら、お前と仲のいいあの侍女の子。名前はなんて言つたかしらねえ。確かクララだつたかしら？お前が実は私を、なんて知つたら……」

俺は想像した。

こいつを嬉々として女に仕立て上げるあの侍女が、嬉々として侍女仲間にその噂を広める様を。それを本気にしたエーファ様が真剣で襲いかかってくる様を。背後でルドヴィヒが引き攣つた顔をして、ハンバートが手を叩いて喜んでいる光景すら目に見えるようだ。勿論、事の元凶ルシアスとはつくに雲隠れしていることだろう。

「……」

「行くわよね？」

そして。ルシアスごときに、ルシアスごときに！丸めこまれた俺は街中で奴のお供をするはめになった。なつてしまった。

ルシアスを見た目「だけ」は美人に見えないこともないので、普段よりも地味な格好をしているにもかかわらず、結構視線を集めている。もつとも、全世界の人間に注目されたところでこいつが委縮することなんてありえない。人の視線が痛いのは俺だ。何て理不尽。

そんな俺の気持ちに配慮することなど勿論ないルシアスは、能天気に空を見上げて伸びなどしている。殴りたい。

「なんて青い空かしら。まるで私の自由を祝福しているかのようねっ」

「……」

「でも日差しが強いわねえ。日傘が要るかしら？ねえ、どう思う？」

「……」

「なーに拗ねてるのよ？お前の日傘も買っただげるから機嫌直しなさい」

「いらねえよ」

「あらそう。あとで日焼けで泣いても知らないわよ」

「……それはあれか？色黒な俺に対する挑戦か？」

「あら、あんなところに救いの手を求める子羊が！」

「人の話を聞け！」

逃げ足の速いルシアスはドレス装着とは思えない驚異的な速さで人ごみの方に駆けていく。俺を撒くためにそうしたのかと思ったが、奴の向かう先には本当にガラの悪い男たちに絡まれる女の姿があったので、渋々後を追いかける。

ルシアスは男共と女の間は無理やり割り込むと、「嫌がつている女の子を力ずくでどうしようなんて紳士のすることじゃなくつてよ」とまあ一応は正論を唱えた。

しかし正論でもこいつの口から言われると受け入れがたいのは俺だけか。俺だけなのか。

俺は釈然としないものを感じながらも女の側に歩み寄り、彼女が本当に女なのか確認した。こいつも実は女装した男かもしれん。五年前までの俺ならこんな馬鹿なことは考えなかった。歳月は人を変える。

男共はまさか女一人（実際は女じゃないが）で自分たちに立ち向かってくるとは思っていなかったらしく、戸惑ったように顔を見合わせた。

それに調子づいたルシナスは更に演説をぶちあげた。

「いい？腕力に訴えるなら簡単なのよ。普通の男なら当然、女よりも強いわよね。でもね、それじゃあ全くロマンがないでしょ？安易な方法よりもあえて茨の道を選ぶ。その気になれば結果は手に入られるけど、そんなことは億尾にも出さず技巧を凝らして向こうからやってくるように仕向ける。それでこそ男つてものでしょうが！」

「あのなあ」

と男の一人が呆れたように口を挟むが、

「お黙り！！」

「はい……」

ルシナスに一喝されて大人しくなった。情けない。

「貴方たちには想像力つてものが足りないわね。よくお聞きなさい。世の中には実は男になりたかった、なんて人もいるのよ？貴方たちそんな体たらくで彼らに申し訳ないと思わないの？例えばよ、貴方たちより私の方がずっと男に相應しいわ、と言われたら胸を張って言い返せる？」

なんのこっちゃ。

男共は狐につままれたような顔をしている。そりやそうだ。今の内容が理解できたら、そいつはルシナスの同類に違いない。

俺はわけのわからん演説の隙に、絡まれていた女を逃がすことにした。女は戸惑いつつも「ありがとうございます」と礼を言いながら去って行った。その背中を眺めながら、俺は複雑な心境だった。

「いいことしたなあ」という達成感より「お前だけでも逃げる」的な自己犠牲精神をひしひしと感じるような気がしてならない。

振り返れば、「今日はこれくらいで勘弁してあげるわ」と胸を張るルシナスと、「ありがとうございます……」と疲労困憊したような男共の姿が目に入った。お疲れさん。

なんつつか、こつちまで疲れるような光景だ。いや、俺は何もしてないんだけどな。

「人助けっていいことよね」

「……」

繰り返すが、正論でもこいつの口から言われると受け入れがたいのは、絶対に俺だけじゃない。

俺が初めてルシアスと会ったのは、まだこいつの見た目と中身が一致していなかった頃、つまり外見だけはまともだった十一年前だ。俺と、今は宰相補佐なんてものをやらされているルードヴィヒはルシアスのご学友に選ばれた。ある程度の身分があつて年齢が釣り合つていたから、なんて機械的な理由だったが、親父は喜んだし俺も同じ年の王弟に興味はあつた。

第一印象はな、よかったんだよ。

当時からルシアスを見た目「だけ」は良かった。金髪碧眼のいかにも王族の若様つてかんじの美少年だ。多分、母親似だろう。俺は会ったことないが、下級貴族ながら並みいる上級貴族・王族の女どもを差し置いて「傾国の美女」の名を欲しいままにした麗人つて話だ。

で、それに目をつけたルシアスの親父が、光の速さでルシアスを孕ませたはいいが、当時既に王妃がいたもんだから、当然結婚はできない。この国は一夫一妻制だからな。

しかもこの王妃つてのがやたら嫉妬深い方だったようで、どんな手を使つたか知らんが、ルシアスの母親を王城から追い出しちまつたらしい。旦那の方は、まだ未練があつたようだけどな。

母親は、ルシアスを生んですぐに死んだ。

ルシアスはそれから父親が死ぬまでの十四年間、母方の祖父母に育てられてひっそりと生きてきたというわけだ。

俺はともかく、由緒正しい家柄のルードヴィヒがルシアスに仕えるようにと選ばれたのは、当時の国王陛下、つまりルシアスの兄上の配慮だった。

この人がなあ、めちやくちや弟想いのいい人だったんだよ。

とても無責任な親父と嫉妬深い母親から生産されたとは思えない、穏やかで誠実な人柄で、ああ、生きていたら俺は絶対こっちに仕えたかったっていうようなまともな方だ。

何でも、即位する前からルシアスにちよくちよく会いに行ってたって話で、自分が即位したら家族として迎えたいと思ってたとか。

なんで俺がそんなことを知ってるかっていうと、直接陛下にルシアスのことを頼まれたからだ。

すげえにこにこしながら「あの子を頼むよ」なんて言ってくるわけ。あれが「あの子」ってたまかよ、って今なら思うんだろうが、当時はまだ俺も若かったからな、素直に「はい」とか返事してた上に、「気の毒な王弟殿下に楽しいこと教えてやらなきゃな」とも思ってた気がする。

まあ、そういうわけで最初はよかった。

ルシアスの奴も猫被ってたんだろうが、王子の割には気取ってなくて付き合いやすかったし、むしろ堅物のルドヴィヒの方がやりにくかった。あいつが一番、常識人なんだがな。

俺が「こいつなんかおかしいんじゃないの？」とルシアスに対して思ったのは、初対面から二カ月ぐらい経った頃のことだ。

その頃、ルシアスはちょうど、剣術に真面目に取り組み始めていた時期で、動機は剣術の達人で体格も立派な陛下に憧れたからなんだが、いくらなんでもあの練習ぶりはちよつと異常だったね。

剣術の指南役は、女ながらに常勝將軍と称えられていたエーファ様だった。あの人に毎日本気で扱かれても根を上げない十四歳って、ただものじゃないだろ。少なくとも俺には無理。いつもへらへらしてくだらないことばかり言ってるくせに、生傷だらけになっても意識を失う寸前までぶったたかれても、泣きもしないし愚痴も言わない。

何が凄いつて、そこまでして耐えてたのが全部、陛下のためって所だよ。

「兄上のお力になりたい」が当時のルシアスの口癖だった。王弟つてことで、望めばどんな教育でも受けられる環境は整ってたからな。実際、武芸も政治も真面目に学んでいたみたいだ。

陛下はそこまで厳しく教育するつもりじゃなくて、自分の母親のせいで不遇だった弟に対する償いのつもりだったんだろ？が、ルシアスとはとにかく陛下を神格化してたからな。

曇りなく信じてたっていうか、陛下の言うことには絶対服従というか。多分、「死ね」って言われたら死んだんじゃないか。陛下もつくづく早死にが悔やまれる人だ。あの人が言えば、女装なんて絶対しなかっただろ？からな、ルシアスも。

そもそも陛下が健在なら、今ほどこいつの変人ぶりが表立って明らかになることもなかっただろ？よ。

……あ、勘違いするなよ。

陛下がいようといまいと、ルシアスがどこかおかしいのは変わらない。

なにせルードヴィヒの名前を騙って娼館に通い詰めた挙句に、本人に断りもなく自宅に娼婦全員招待したり、いけ好かない貴族を狩りに連れ出して猪の群れの中に置き去りにしたりとか、平気でやるからな。

しかも、絶対反省しねえの。

「他人の困った顔を見るのが好きなんだ」とぼざいているのを、俺は聞いたことがある。

しかし流石のルシアスも最愛の兄上には逆らえないのか、というか逆らう気か？もともとないのか、陛下の前では別人かって言うほど大人しかった。陛下に迷惑がかかるようなことは絶対にしなかったし、たまに咎められれば心底落ち込んでいた。

だから陛下さえ居てくれれば、俺もこんなに苦労することもなかったんだよね……ルシアスの良心が発揮される相手が、陛下限定つてことを考慮に入れるとしても。

陛下がいなくなった途端に、このざまだ。

ルシアスの能力に関しては、まあ意見はわかれるところだろうが、俺はそこそこ優秀だと思ってる。能力自体はな。と言っても、それは陛下健在時に奴が奴らしくもなく努力しているのを傍で見ていたから言えることであって、今のこの変人全開なルシアスを見て優秀とか賢王とか思う人間はいないだろう。

今はせいぜい要領がいいとか、その辺だな。

ルードヴィヒはじめ真面目で手抜きをしない部下を見極める目だけは、一級品と言ってもいい。自分が楽するため、以外の目的で能力発揮して欲しいんだが。良い国を作るため、とか。無理か。

「ちよつと、ヴェンツェル。そんなところでぼーっと突っ立ってちゃ通行の邪魔でしょ」

ルシアスに腕を引っ張られる。

「……往來でけつたいな説教かましてたのはお前だろうが」

「えー何？聞こえなあい」

「難聴か。気の毒に」

「ちよつと！酷いじゃない！頭だけじゃなくて耳までおかしくなつたですって？」

「聞こえてるんじゃないか！しかもそこまで言つてねえし！」

「わかつてるわよ。そんな目の前に人参ぶらさげられた馬みたいに力いっぱい食いつかなくてもいいのに。軽いじゃれ合いでしょ」

しれつと言い、ルシアスは足取りも軽く歩き出す。

あああ疲れる。帰りてえ。

だがこいつを野放しにしておいてはどうなるか想像もつかない。これでも、こんなんでも！国王だしな。出かける前は一人で行けとは言ったが、実際に一人で行かせたら帰ってくるまで俺の胃が持たん。

俺は肩を落とし、優雅な女装野郎にとぼとぼと続いたのだった。

ある国王と護衛騎士の逃避行 2

ルシアスがこうやって王宮を抜け出すのは、なにも初めてのことじゃない。

王弟時代も国王になってからも、息抜きと言い張っていなくなることは度々あった。仮にも王宮の警備をどうやって突破してるんだか。国王になってからは私室の隠し通路と変態諜報員ハンバートも加わって、ますます脱走は簡単になったことだろう。

陛下はなんだかんだ言ってこいつに甘かったから、王弟時代は脱走したところで特別なお咎めはなかった。

国王になってからは尚更だ。こいつより偉い奴なんているわけないからな。

凄いのはこれだけふらふらしてるくせに、誘拐とか暗殺とかそういう不測の事態に巻き込まれたことがないことだな。どんだけ運いいんだよ。更に凄いのは、王宮の連中も国王がいなくなっても誰も心配しないことだ。ルドヴィヒは頭が痛いかもしれんが。あいつもいろいろ諦めれば幸せになれるだろうに。

ルシアスは慣れた様子で、露店をひやかしたり自分に見惚れる男どもに微笑みかけたりしている（俺からすれば気色悪いだけだ）。

容姿の麗しさを除けば、王族と思えない溶け込みっぷりだ。

上流階級のお歴々は庶民の生活に基本興味ないし、退屈のあまりに暇潰し目的で気まぐれを起こすことはあっても、自分の生活と程遠い別世界を覗いてみたいってただだからな。どうしてもその場から浮くつつつか、場違いなところはある。

しかしこいつは見事に背景の一部になっている。脱走歴の長さが窺えるな。

王宮に上がる前のルシアスのことは、奴自身が話したがらないので知らないが、その頃から前歴を順調に積み重ねていたと、俺は見ている。

じやなきやこの馴染みっぷりはおかしいだろ。なんか顔見知りっぽいやつもちらほらいるし。

恐ろしいのは男も女も「今日も美人だな」とか「今日も素敵ね」と笑顔でのたまうことだ。いや、ルシアスの顔面にけちをつけたいわけじゃなく、どちらからもルシアスが「異性」として見えているらしいことが驚きなのだ。

なぜだ。

俺の周りでは完全に「変な奴」扱いなのに。「そういえば顔は良かったつけ」と時々思い出されているかも怪しいくらいなのに。

ルシアスは、無駄な愛想を振りまきつつ、迷いない足取りで表通りから離れた路地に踏み込む。賑やかさや活気が消えて、何となくじめじめした薄暗い雰囲気漂っている。

だが本当に気分を悪くさせるのはそんなものではなく、すれ違う人間　ぱつと見ただけでまっとうではないとわかる人間たちの目だ。視線だけで身ぐるみはがされそうな、無遠慮な濁ったその目を見るのは初めてじゃないが、何度でも気分は悪くなる。

それでも腰の剣に手をかけて威嚇すると、大半は慌てたように視線を逸らす。小物だ。

俺が駆け引き（なんて言うほどのものじゃないが）をしている間にも、ルシアスはどんどん歩いていき、両脇の怪しげな店に挟まれて押しつぶされそうになっている、看板のない店の扉に手を掛け何度か来ていなければ表向きは普通の家に見えるだろう　勢いよく店内に足を踏み入れた。

「いらつしやい」

恐ろしく無愛想な店主が、無機質な挨拶をくれる。しかも顔も怖い。こんな場所に立ってるからって、客商売としてどうなんだ、それは。

一方、相手が犯罪者だろうといたいけな子供だろうと、自分を曲げるということを知らない我らが国王は満面の笑みで「はあーい、相変わらず素敵な仏頂面ね、ジョー」と手を振る。

店主はぴくりとも表情を変えない。まさに鉄壁の無表情だ。それどころか無言で「早く出て行け」と言わんばかりに睨んでくる。

俺はその理由を知っている。できれば知りたくなかったが。

唐突だが、ルシアスにはある才能がある。

ずばり賭け事で勝ち続ける才能だ。賭博から始まり、盤上ゲームや、騎士同士の決闘でどっちが勝つのか、明日の天気が晴れか雨かなどという些細な題目でも、賭けという言葉が絡んでこいつが外したことはない。勘がいいのか、運がいいのか。ルシアスにかかれば歴戦の勝負師も赤子同然だ。

あまりにも勝ちすぎて、既にこの辺りの賭博場の半分ほどからは出入り禁止をくらっている。

ちなみにこの店も、店主の顔を見る限りそろそろ出入り禁止になりそうだ。俺が覚えている限りでも、相手の全財産を巻き上げるのは当然、その後は大体激怒した相手と乱闘になるか、哀れな身の上話に上手くいけば土下座がついてくる。

店にいた全員の財布を目の前に積み上げられた時は、流石の俺も開いた口が塞がらなかった。

そんなわけで誰にとっても迷惑でしかないルシアスなのだが、昼間からこんなところに来ていることからわかるとおり、自重しようという気持ちはこれっぽっちもない。

店主の熱視線もなんのその、鼻歌交じりに賭け事が行われているテーブルへ向かう。ルシアスの相手になってくれるのは、まだ奴の存在を知らない初心者か、よほど自分の腕に自信がある強者のどっちかだ。どっちにしても心を折られるのは相手と相場が決まってる。

俺は虐殺ショーなんて見たくない。というか、正直見飽きた。

カウンターに陣取って、不機嫌な店主の面を眺めながらそれほど美味くもないつまみをつつく方がまだましってもんだ。

「どうしてあれを止めないんだ」

座った途端、待ってましたとばかりに店主が話しかけてくる。

「というか、俺？俺が悪いのか？」

「……俺はあいつの保護者じゃない」

「違うのか」

「違う」

「じゃあ本物の保護者は何をしてるんだ」

おっさん、何でそんなに保護者にこだわるんだよ。女装はあれとしても、剣は馬鹿みたいに強いし、国王だし、とても保護が必要な人間じゃないぞ、あいつは。

店主は無表情なりに迷っているような顔で、口を嚙む。

決心がついたのは俺が皿のつまみを八割方、平らげてからのことだった。

「正直に言うが……あれは、少し頭がおかしいのではないかと思うんだが。医者に診てもらった方がいいんじゃないか」

「……」

正直すぎるぞ、おっさん。しかしよくわかったな。いや、誰でもわかるか。

よくぞ見破った！あれこそこの国で一番おかしい男だ！

と、言いたいところだが、迂闊なことを口にして後でエーファ様に処刑されるだけは嫌なので、相手の出方を窺うためにも「どうしてそう思うんだ？」と質問してみる。こうすればこっちは喋らなくてもいいからな！

だが喉を湿らそうとグラスに口をつけた瞬間、店主は俺を嘲笑うかのようにこう言ったのだ。

「いや、なに。以前にここに来た時、こう言っていたものだからな

自分はこの国の国王だと」

「ブッ……」

やべ、鼻に入った。

「何考えてるんだ、おまえは……！」

すぐさまルシアス連れ出し　あれだけの短時間で、既に相手は瀕死状態だった。鮮やかすぎる　人目も憚らず大声をあげるが、当の本人はけろっとしている。

反省どころか「もう少しで身包み剥がせたのに」とどこぞの追剥のようなことをほざく始末だ。

お前、国王だろ。哀れな一般市民のなけなしの給料取り上げて何がしたいんだよ。いや、この際それはどうでもいい。

「馬鹿だ馬鹿だと思ってたがここまで馬鹿だとは思ってなかったぞ、馬鹿」

「四回も言わなくてもいいじゃない」

「数えなくていい。まさかお前、外に出るたびに触れ回ってるんじゃないだろうな」

「そんなことしないわよ、面倒くさい」

そういう問題じゃない。

「じゃあ何であのおっさんにはほいほい言うんだよ！自分の立場わかってんのか？」

「なあにヴェンツェル、まさか忘れたの？何を隠そう、私はこのバルトライヤ国の女お」

「他に口外した相手はいないんだな？」

「いないわよ。ちよつと興味あつただけだし」

「興味って？」

「目の前の美女が、突然自分が国王だって名乗ったらどんな反応をするのかなって」

「……どんな反応だったんだ？」

「そう、それよ！」

ルシアスは怒りの形相になる。

「あの中年、何て言ったと思う？『いくら見た目がいいからって頭がそれじゃ結婚は厳しいぞ』ですって！！」

「はは、言われたな」

「お黙り」

ぎろり、と俺を睨む目つきが怖い。

珍しく本心から苛立つてるようで、それが少し意外だった。

ルシアスは、行動も言動も大概ふざけていてまさに傍若無人を体現するような奴だ。が、その反面、感情の起伏はほとんどない。憤慨したり、悲しんだりしていても、それは全部「そういう振り」であって、内心では何とも思っっちゃいないのだ。

そうやって他人を揺さぶって、振り回して、反応を観察している例の「他人の困った顔を見るのが好きなんだ」発言も、そういうところから出てるんだらうと俺は見ている。

だから、少しでも本気で怒りを見せるルシアスは、俺にとってはかなり珍しいものだった。

「そんなに怒ることか？まさかそのなりで結婚したいわけじゃないだろ」

「それはどうでもいいのよ。頭がおかしい扱いされたのが腹立たしいの」

……まさかお前、頭がおかしくないつもりだったのか。

いや、それはないだろう。流石のこいつも、自分のやってることがいかに馬鹿馬鹿しくて迷惑で脱力ものなのかぐらいはわかってるはずだ。

それとも 本気でわかってなかったのか？

まさか。まさか、な。

「なによ、その顔は」

内心が顔に出ていたのか、ルシアスは不機嫌そうに口を尖らせる。「お前の考へてることはわかってるわよ。でも私は本気で言ってるの。百歩譲って、私のやってることや言ってることが常識から外れてるとしましょう」

「百歩も譲るところなのかよ、そこ」

「お黙り……そう、だからといって、私の言ってることを理解しなくてもいい、理解できるはずなんてないって放棄されるのは腹が立つのよ。どうして頭がおかしいって決めつけるの？その根拠は？私

はずっと考えていてもわからないのに、どうしてお前たちはその一言で何もかもわかった気になっているのよ？」

「何が言いたいのかわからん。あのおっさんがお前の言うことを信じたとしたら、お前が一番困るんじゃないか？ばらしたかったってことかよ」

ルシアスが珍しく真面目に語っているのはわかったが、これはこれで解読不能だ。専用の通訳が必要かもしれん。

「そういうことじゃ……」

歯切れが悪い。鬱陶しいくらい意志がはっきりしているこいつにはしては珍しいことだ。さっきから珍しいことだらけだな。だからって俺にとって全く希少価値はないし、嬉しくもないが。

「つまりね」

「……」

「……」

「お二人さん、会話がなくて焦ってるお見合い同士みたいだよ」

耳元で息を吹きかけられながら言われて、俺は鳥肌が立った。

咄嗟に抜剣しなかったのを褒めてもらいたい。正直、「しなかった」じゃなくて「できなかった」なんだが。

ぎぎぎ、と首を回せば見覚えのある顔がそこにはあった。

「ハンバート」

「お久しぶりー騎士のお兄さん。いいところを邪魔しちゃったかな？」

「そんなわけあるか！」

「いいねえ、その些細な弄りにも全力で反応するところ。嬉しくなっちゃうなあ」

抑えろ、俺。

下手に何か言ったらこいつの思うつぼだ。

非常に認めたくないことだが、俺は剣も口もこいつに勝てた試しがない。

「何でお前がここにいるのよ。叔母様を見張ってなさいって言った

でしょ」

一瞬でいつもどおりの調子を取り戻したルシアスが、責めるように言う。さっきのは一体、なんだったんだ。

「ごめーん王様、ばれちゃった」

だらしない笑みを浮かべて、ハンバートはあっさりと白状した。お前、悪いと思ってないだろ。吹けば飛ぶような軽さだぞ。

ルシアスが顔を顰める。

「ちよつと、真面目にやってよね。何のためにお前を雇ってると思ってるのよ」

「そんなこと言っただって、僕にもいろいろ事情があるんだよ」

「お前の事情なんて知らないわよ」

「まあ聞いてよ。おばさんから伝言を預かってきたんだ」

「言ってみなさい」

「ええと…『今すぐ帰ってこなければどうなるかわかるな?』」

「……」

「……」

「……」

「おい、帰ろう!」

「な、何おじけづいてるのよ、それでも騎士なの?」

「騎士だからこそ逆らったらまずい相手はわかるんだよ!お前は馬鹿だからわからんだろうけだな!」

「酷い!また馬鹿って言っただわね!」

「そこしか聞いてないのか、お前は!」

「遊んでないで早く帰った方がいいよ。なんか凄く怒ってたから」

「そんなに?」

「最初はそこまでもなかったんだけど、話してる最中にドレスがいつぱい届いて。あれ、頼んだの王様でしょ?誰も何も聞いてなかったみたいで、おばさんが『万死に値する』とか何とか呟いてたよ」

「そんなことしてたのかお前は…」

どうせあれだろ、あれ。『全員強制女装舞踏会』。こういう時だけ手配が早いんだからな。俺は当日、具合悪くなる予定だから関係ないけど。

しかめっ面で考え込んでいたルシアスは、渋々従うことに頷いた。こいつの場合、帰るのが嫌というより他人の言うことを聞くのが嫌なのだ。しかしここで駄々を捏ねた場合、後々生命の危機に陥るだろうことは火を見るより明らかだろう。

ルシアスは、酒場で巻き上げた金をハンバートに渡し、「いつものところに、いつものやつね」とだけ言って、さっさと踵を返した。わけがわからない俺はその後を追って、どういう意味か訊ねる。返事はあっさり返ってきた。

「本当はこの後、兄上のお墓に行くつもりだったのよ。お花を持ってたね。でも、叔母様をこれ以上待たせたら私がお墓に入ることになるそうだし。仕方ないからハンバートで我慢するわ」

「だったら寄り道なんてしてないでさっさと行けばよかっただろ」「あのねえ、私は庶民と違って普段から財布を持ち歩く習慣はないの。いつもと違う動きをしたらルデイに気づかれるでしょ。最近、勘が良くて困っちゃうわ。私の隠してたへそくりも没収されてたし……だからって兄上のところには雑草なんて持っていくわけにいかないじゃない」

「相変わらず、兄上大好きだなお前。でも、なんでわざわざ俺まで連れ出したんだよ？陛下のところに行く時、いつも一人で行ってるだろ？」

勿論、無断でな。

俺の指摘が堪えたわけではないだろうが、ルシアスは黙り込んだ。それ自体は別に珍しいことじゃない。都合の悪いことを聞かなかつたことにするのは奴の特技だ。

が、答えが返ってくるのを諦めるほど長々と沈黙した後、まるで独り言のように呟いた「なんでもないわよ」という一言は全然なんでもなく聞こえなかった。

王妃の独白 1

最初に名乗っておきましょうか。

わたくしの名はソフィア・インウィディア。バルトライヤに嫁いでからはソフィア・バルトライヤ、もしくはソフィア王妃と呼ばれておりました。

けれど王妃と呼ばれていたのも最早過去の話。息子が即位してからは王太后としてそれまでと変わらず、けれどそれまでよりも心穏やかに何不自由ない生活を謳歌していたわたくしですが、まさかその息子がわたくしより先に逝くとは思ってもみませんでした。

息子は、良い王だったと思います。

親の欲目と笑ってもらっても構いません。常に公明正大、有能で、慈悲と冷徹さを同居させた稀有な王だったと言い切るのに、なんの躊躇がありません。

わたくしには過ぎた息子でした。

だから神に愛されて、若くして天に召されたのでしょう。それにこんなわたくしが、同じく神に愛されたクリスティーネを死に追いやったわたくしが母であることを、神は許されなかったに違いありません。

少し、昔話をしましょう。

わたくしには弟がおりました。わたくしより二つ下の、美しく、生まれながらに全てを手にした弟が。

全て、とは文字通りの意味です。

インウィディア国王の長男として生まれた弟は、何もしくなくてもいずれ国王となる身分です。それに生来、利発で健康、容姿にも非常に恵まれておりましたし、愛想がよく人好きのする性格でしたから、両親はもとより、周囲の人間全てに愛されておりました。このわたくしを、除いては。

わたくしは、弟を愛することがどうしてもできませんでした。いえ、少しは愛していたのかもしれませんが。弟が華やかな笑みをわたくしに向けるたび、舌足らずな口調で「姉上」と呼びかけてくるたび、本心から笑い返したことも確かにあったのです。

けれどそれ以上に、わたくしは弟を憎んでおりました。

それは弟が何もかもに優れ、全てにおいてわたくしを超越した人間だったからに他ありません。

弟はおよそ完璧なほどに整った容貌をしておりました。わたくしとて醜かったわけではありません。それでも女でありながら、異性である弟よりも明らかに劣っていたのです。わたくしは自分の顔を厭いました。

弟は著名な学者に賞賛されるほどに頭がよく、將軍に太鼓判を押されるほどに軍才に優れておりました。

わたくしが一を理解する間に、弟は十どころか百も理解してしまうのです。それも、大した努力もせず、授業をすっぽかすこともあるのに、です。弟と接する時は目を輝かせる教師が、わたくしには何の期待もしていないことはすぐにわかりました。

弟は、何をしても人を引き付ける人間でした。

けして品行方正だったわけではありません。むしろ我侭で、口が悪く、やりたいと思ったことは多少の問題があっても我慢せずにやってしまう方でした。なのに、それで人に嫌われたり憎まれたりといったことがなかったのです。苦言を呈する者もありましたが、最後には「あの方だから仕方ない」と楽しそうに笑うのです。

王女として、常に自分を戒め、それに相応しい行動をとろうと努めるわたくしの前では、誰もが丁寧ですが緊張していて、何より無関心でした。両親でさえ、弟がいる時にわたくしが口を開くと、つまらなそうな顔をしたものです。

おわかりでしょうか。

わたくしの自尊心は、ずたずたでした。

弟に非があつたわけではありません。そもそも弟にとっては、わ

たくしなど眼中になかったでしょう。殊更わたくしを貶めなくとも、誰もが弟を愛し肯定することは、死が等しく人間に訪れることと同じくらい絶対でした。

それゆえにわたくしはますます弟を憎み、劣等感と自己嫌悪で窒息しそうな少女時代を過ごしておりました。

転機が訪れたのは、わたくしが十八歳になった春のことでした。

西の王国バルトライヤの王妃として、わたくしが選ばれたのです。表には出しませんでした。わたくしは狂喜しました。人生で初めて、弟ではなくわたくしが望まれたのです。それが政治的判断による妥協であつたとしても、望まれたのがわたくし自身ではなくインウィディア王女の肩書であつたとしても、王妃として立つのはこのわたくしだけです。

バルトライヤ王妃として敬われ、将来の国王を生む権利はわたくしだけのもの。夫となる人が十二も年上で、女嫌いと言われていることもこの事実の前には瑣末なことでした。

程なくして、わたくしはバルトライヤに嫁ぎました。

出国する前、両親は涙ながらにわたくしの別れを惜しんでくれました。弟は「虐められたら私が仕返ししてさしあげますよ、姉上」と子供のようなことを言っていました。けれどもわたくしの心は冷めていました。両親にも弟にも、特にこれといって酷いことをされたわけではなく、それでもわたくしの中に彼らへの愛情は欠片も存在しておりませんでした。身の内に巣食った憎悪から解放されることへの安堵があつただけです。

その証拠に、十年後に父がこの世を去った時もわたくしは泣きませんでした。

……聞き苦しいことを言いました。

バルトライヤ国王は、見るからに軍人という印象の偉丈夫な方でした。女嫌いという噂は本当らしく、わたくしに対しても素っ気ない態度ではありましたが、もともと愛情など期待していなかったわたくしにとってはどうでもいいことでした。

結果的に、媚びることも縊ることもなかったわたくしが扱いやすかったのでしょう。王は、義務を果たすために必要な程度には、わたくしのもとに通ってきました。

それが仲睦まじい証に見えたのでしょうか、周囲の、特に王妃を巡る争いに負けた女性たちは、おそらく嫉妬からでしょうが、わたくしに王が女嫌いである理由を事細かに教えてくれました。

なんでも王の母君は不貞を働いたという噂が絶えない女性だったらしく、王も正統な世継ぎではないのではないかと、玉座を継ぐ資格はないのではないかと、と随分疑われたそうです。いえ、今も疑われているのでしょうか。

後で本人に訊ねたところ、「私は女嫌いではなく、人嫌いなのだ」と自嘲気味に言われました。

「母がどれほどだらしのない人だったのか、私が一番よく知っている。だが、それを認めては私が惨めにすぎる。つまらない自尊心を捨てきれないから、のうのうと玉座に座っているのさ。たとえそれが別の意味で苦痛であっても」

思えばこの時、わたくしは王の心に触れていたのでしょうか。

自らの弱味を、弟から離れた今もわたくしを蝕む劣等感をさらけ出せていれば、何かが変わったのかもしれない。けれどわたくしにはできませんでした。なぜかはわかりません。王を信用していなかった、矜持が邪魔をしたと言うのは簡単です、全くの間違いでもあります。おそろくわたくしの心は既に自分でさえ開けることができないほどに、重く錆びついていたのでしょう。

それでも表面上は、穏やかに過ぎて行きました。

二年後にわたくしは王の子を産みました。世継ぎの子です。

王は、血筋のはっきりしない自分の子供を次代の王にしているのか、迷っていたようですが、わたくしは嬉しかったです。この子は、わたくしが命をかけてこの世に生みだした、唯一無二の生命です。子供の誕生は、こんなわたくしでもこの子のために生きることは許されるのではないかと、という天啓にすら思えました。かつてなくわた

くしの精神は安らかでした。初めて、自分のことを愛せたような気がするほどには。

その三年後です。

あの女が、クリステイーネが現れたのは。

クリステイーネ・アラベラは下級貴族の一人娘でした。貴族とは言っても、成功した商人の方がよほど裕福だったでしょう。そんな娘が王の主催する夜会に紛れ込めたのは、もって生まれた美貌と運のおかげと言うしかありません。

明らかに周りから数段劣る衣装を身に纏っていても、クリステイーネの美しさは疑いようもないものでした。

わたくしは今でも、あの夜のクリステイーネをはつきりと思い出すことができます。

あの黄金のような髪も、白磁のような肌も、彫刻よりも柔らかく彫刻よりも完璧な容貌も、全てが息を呑むほど美しかった。彼女こそ、およそ神が創り出せる最高の造形美を体現する人間でした。

されどわたくしが本当に戦慄したのは、その美しさに対してではありません。

あまりに完璧で、あまりに美しいその容姿は王の目にも止まりました。王とて、女嫌いではありませんが不能ではありません。御前にお召しになりました。この時は、おそらく素晴らしい芸術品に対する感嘆のような気持ちからだったのでしょう。

クリステイーネは、礼儀正しく控え目でした。これほどの容姿を持つていれば、これが王に取り入る好機であることはわかっていてもよさそうなものですが、傍目から見ても明らかにそんな素振りはありませんでした。

もつとも、それは逆に王にとって好印象だったようですが。

短い言葉のやり取りの後、辞去を許され、クリステイーネはにこりと笑いました。

その笑みが、わたくしを戦慄させたのです。まるで子供のような、無邪気な笑みでした。周囲を圧倒するほどの美を持ちながら、それ

を利用することなど考えもしないような、ただ緊張から解放されたことが嬉しいと言いたげな……そう、見ようによつては傲慢とも言えるかもしれません。傲慢であり、純粹であり、それゆえ人を引き付ける。そういう笑い方でした。

もし、わたくしが自分の動揺にとらわれず、王がそれをどう受け止めたかに注意を払っていたら……いえ、今更言つても仕方のないことです。

王は、クリスティーネをしばしば王宮に呼び寄せるようになりました。

彼女のことをよく知るにつれ、わたくしはその邪気のなさ、欲のなさに驚かされたものです。捻くれたわたくしの目から見ても、クリスティーネは愛すべき少女に思えました。今でも、考えることがあります。あれは演技だったのだろうか、と。そしてその度にこう思ふのです。演技などではなかった、と。

クリスティーネは、真実、純粹無垢な少女でした。

神に愛されし者とは彼女のような者を指すのでしょうか。言葉にも態度にも嘘偽りはなく、それでいて他人を惹きつけてやまない魅力がありました。時として、特別な何かを持って生まれる人間はいるものです。弟も、クリスティーネも、そういう人間でした。

王は、そういうクリスティーネに癒され、他の大多数の人間と同じように惹かれていたのでしょうか。実際は王の一方通行だったのですが。なぜならクリスティーネには既に婚約者がいました。ラウルという、これも下級貴族で、幼馴染の関係だったそうです。彼女の話から察するに、クリスティーネの両親はこの結婚にあまり乗り気ではなかったのでしょう。確かに彼女ほど美しければ、もっと身分の高い男性との結婚も夢ではありません。あわよくば上等な獲物を釣り上げて、ラウルとの婚約は破棄してしまえ。そんな思惑が透けて見えるようでした。

クリスティーネ本人は、ラウル以外は眼中になかったようです。でなければ、王があそこまで思い詰めたはずがありません。少し

でもなびく素振りがあれば、ラウルなど王の敵ではないのですから。それをあのような暴挙に出たということは、クリスティーネが王に全く興味を示さなかったという証拠ではありませんか。

ある日、王はわたくしを私室にお呼びになりました。

そしてこう言ったのです。

「クリスティーネを私のものにした」と。

わたくしは咄嗟に言葉が出てきませんでした。何を言えというのでしょうか。悲しめばいいのか、怒ればいいのか、正妻らしく余裕を見せればいいのか。おそらく最後の対応が王にとって一番都合のいい対応だったのでしょうが、実のところ何を感じたのか、もう覚えておりません。案外、何も感じていなかったのかもしれない。

王は、クリスティーネを愛している、とか何とか言っておりました。自分には彼女が必要だから、愛人として遇することを許して欲しい、とも。まあ、王なりに誠実だったのでしょう。

数日後、わたくしはクリスティーネに事の次第を問いただしました。

可哀想に、彼女は憔悴しきっておりました。合意の上でなかったのは、一目瞭然です。王の言葉を伝えると、真っ青になって泣き出し、わたくしに縋りました。ラウルに顔向けできない、家に帰してほしい、と子供のように泣く姿は、この世のものとは思えぬ美しさでした。

その姿を見て、わたくしの胸にどんな感情が湧き上がったか、想像できるでしょうか。

かつてない憎しみです。

彼女が王を奪ったから、女として到底敵わない美貌を持っていたから、ではありません。それならばどれだけよかったことか。わたくしが真に憎かったのは、彼女の曇りのない清廉さでした。外見のみならず、内面にも歪みや後ろ暗いところなど一つもない、非の打ちどころのない彼女の存在そのものが、憎くてたまらなくなったの

です。

それは、八つ当たりだったのかもしれませんが。

先にお話したとおり、クリスティーネはわたくしの弟に極めて似ておりました。どこがどうということではなく、他者の愛や関心を自然に集めることができるという一点において、二人ともわたくしなど足元にも及ばない高みにいたのです。

弟もクリスティーネも、わたくしを見下したりなどしませんでした。彼らにとつては、当たり前のことなのです。わたくしが欲しくてたまらなかった親愛も興味も、両手にあまるほど抱えて、その価値に気づこうともしない無邪気な生き物。周囲に守られた彼らの魂に実体があるとしたら、それはそれは美しく光り輝いていたことでしょう。

そう、わたくしはクリスティーネという人間に嫉妬していたのです。少女時代、弟に嫉妬したように。憎む理由すら与えてくれないその理不尽なまでの善良さを、わたくしの醜悪な劣等感を甚振つてやまない、内なる光を憎悪しました。

全く心のこもらない慰めの言葉を吐きながらも、わたくしの心は煮えたぎっておりまして。

それでいて酷く冷静でもあったのです。

どうする当てがあつたわけでもありませんが、何をするにしてもクリスティーネの信頼を得ておく方がやりやすいと計算するだけの余裕がありました。

わたくしは言葉を尽くして、クリスティーネを丸めこみました。仮にも外国の宮廷で王妃として生きてきたわたくしと、田舎で平和に育った小娘では役者が違います。貴女が言うことを聞かなければ両親やラウルが苦しむことになるかもしれない、と脅しつければ、もう何も返せません。

そうしてクリスティーネは、名実ともに王のものになりました。

王は、わたくしがあまりにもあつさりと愛人の存在を認めたことを訝しんでいましたが、初恋の成就に舞い上がっていたのか、そも

そもわたくしの王への愛情を信じていなかったのか、すぐに手に入れた宝に夢中になりました。

大変、結構なことです。

王が心からの愛を捧げれば捧げるほど、クリスティーネは不幸になるでしょう。

あの娘のことに關しては、王などよりわたくしの方が余程わかっていました。純粹なだけに、自分の気持ちに嘘がつかないのです。あわよくば息子を国王にしてみせる、と野心でも抱く器用さがあれば、王も興ざめして解放したかもしれません、おそらくそんなことは考えもしなかったでしょう。

そういう意味では、白痴と言ってもいいような娘でした。

家臣たちは、わたくしが愛人に夫を盗まれた負け犬だと信じ切っていたようです。わたくしは氣になりませんでした。進んで嫉妬するふりさえしたものです。

恋人とは引き裂かれ、二十七年上の男に体を暴かれ、味方のない王宮で呼吸することが榮譽だと、言いたいならば言っていればいいのです。

誰がわからなくとも、わたくしだけはわかっておりました。

この生活が、クリスティーネの精神を痛めつけ、傷だらけにしていくものに他ならないことは。

全て承知の上で、彼女を王に投げ与えたのです。

わたくしのように惨めな思いをすればいい。わたくしのところまで落ちればいい。誰もがお前を愛するわけではないと、思い知ればいい。

そんなおぞましい欲望を、クリスティーネはそれなりに満たしてくれました。

けれど終わりは突然にやって来ました。

クリスティーネが、妊娠したのです。

王妃の独白2

クリスティーネの妊娠は典医の口から知らされました。

彼によると、母体は極めて精神不安定であり体も丈夫ではないため、出産は困難なものになるかもしれないということでした。

わたくしは考えました。

放っておいても、クリスティーネは死ぬかもしれませんが。それならそれで結構なことです。

では、死ななかつたら？

今は生きる屍のような生活を送っていても、子供が産まれたら気を取り戻すかもしれません。自分の経験から言っても、我が子は可愛いものです。父親がどうであろうとも。

そんなことは許せるものではありません。

生まれてくるのが男児であればわたくしの息子を脅かす可能性もありましたが、そのことは思いつきませんでした。ただただクリスティーネを幸福にしたいくない、救いを与えたくないということだけで、わたくしの頭は一杯でした。

都合のいいことに、クリスティーネは出産を王宮で迎えたくなーいと言いました。

それはそうでしょう。ただでさえ、好きでもない男と毎日のように顔を合わせなければならぬ上に、周囲から好奇と軽蔑の目で見られていれば、気の休まる時もないはずです。

わたくしはそれにつけこんで、実家にクリスティーネを送り返しました。

王には、出産を心おきなく待つには実家の方がいいでしょうと言っておきました。

家臣たちは、それが目障りな女を追い払ったための口実だと思ったようですが。

そして忘れもしません、あの冬がやって来たのです。

そろそろ子供が生まれるだろうと予想していたわたくしは、典医を呼びつけて、クリスティーネのところに行くようにと申しつけました。

当然のことながら、すこやかな子供を期待してのことではありません。せん。

わたくしは、クリスティーネを殺すように 勿論、こんな直接的な言い方ではありませんでしたが 「要請」しました。

典医は恐慌をきたしました。

自分は人を助けるのが仕事だ、王妃の命令だろうと聞けることと聞けないことがある、と威勢だけはよかったものです。わたくしは鼻で笑いました。立派なことを言っただけで、この男はわたくしと同類だとわかっていたからです。

「イネル・ヴォーンを覚えていて？」

わたくしの言葉に、典医は青褪めました。

その名は、彼と王宮典医の座を争った医師の名前でした。患者を不手際で死なせてしまい、王宮典医はおろか医師としての信用も失って、失意のうちに逝去した、今では誰も覚えていない名前です。

彼の弟子を見つけることができれば、わたくしとて真実を知ることにはなかつたでしょう。

「お前は彼の患者を殺すように、弟子に頼んだそうね。死ななくてもいい患者を殺し、罪のない同僚を蹴落とし、お前がのうのうと名誉と財を手に入れたことはわかっています。人を助けるのが仕事だ、なんてどの口が言うのやら。医師の心を捨ててもその椅子が欲しかったのでしょうか。守りたいのでしょうか。ならばどうすればいいのかはわかるはずですよ」

典医はいともたやすく屈しました。

所詮、典医は典医であり、クリスティーネのような清廉さなど期待すべき存在ではないのです。

わたくしはさりげなく、王が典医をクリスティーネの実家へ遣わ

すように仕向けました。表面に出していなくとも、王が愛しい女の一大事に気を揉んでいたことぐらい察しておりましたから、それはすんなり決まりました。

その後は、何もかも上手くいきました。

典医はわたくしの命に背くことなく、肅々とことを実行したようです。

本当に、人の命とは呆気なく摘み取られるものです。それも、本来ならばそれを助ける者の手によって。あれ以来、わたくしは医師というものを信用しておりません。

王は一気に老けこんだようでした。

もともとそれほど若くはなかったのです。精神的な打撃が、肉体の老化を早めてしまったのでしょう。葬儀は、派手ではありませんが王の想いの深さを感じさせるものでした。クリスティーネの遺体の入った棺を王がどんな思いで見つめていたのか、わたくしが知ったのは葬儀から一月ほど経ってからのことでした。

「お前がやったのか」

唐突にわたくしの部屋にお渡りになった王は、こちらを見もせず、にそう言いました。

あまりにもさりげなく言われたので、一瞬、聞き流してしまいそうになったほどです。怒りも悲しみも、その言葉には込められていませんでした。おそらく、わたくしの答えなど聞くまでもなく、真相を察していたのでしょう。ならばどうしてそんな質問をしたのか、王の心を推し量ることはできませんでしたが。

わたくしは平然と答えました。

王のご想像とおりです、と。

わたくしの行為が表沙汰になれば断罪は免れなかったでしょうが、それならそれでどうにでもすればいい、と思っておりました。自分の罪が、同情されるような理由から行われたものでないことは、よくわかっていました。わかっていても止められなかったのです。そして、ここに至っても、後悔は少しも感じませんでした。何も

感じていない人間に、どのような罰も無意味です。ですからわたくしは、王の反応など気にせずと言ったのです。聞くまでもないことでしょう、と。

王はそこで初めて、わたくしを見ました。

「何故だ」

「何故とは、不思議なことを。夫を奪った女が憎いのに、貴賤が関係ありましょうか」

「お前は私を愛していない」

正直、この返答には驚きました。けれど考えてみれば、王は愚かではありません。クリステイーネへの執着は人並みはずれたものがありました。それ以外では冷静で捻くれた物言いが目立つ方でした。

わたくしは微笑しました。

男女の愛ではありませんが、同士としての連帯感ならば抱いていたのです。王にもわたくしにも、自分でもどうにもできない歪みがありました。ある意味で似たもの同士というのでしょうか。それをこの時、確信したのです。

ですから、正直に答えました。

「貴方が惹かれた部分が、わたくしにとっては憎しみの対象だった、それだけのことです。それに、貴方のことも」

「私が？」

「貴方だけが救われるのは許せなかった。貴方を救うのが、クリステイーネだなんて許せなかった。そういう愚かでつまらない人間なのです、わたくしは」

王は、長い間、沈黙していました。

クリステイーネを葬ったわたくしを憎む気持ちは、勿論あったでしょう。一方で、わたくしが王に対して連帯感を抱いていたように、王もこの時、わたくしに対して哀れみを感じていたに違いありません。でなければ、いくら公にすることが叶わないからといって、一言の罵倒もなかったことに説明がつきません。

あるいは何を言っても無駄と諦めていたのでしょうか。クリステイーネが死んだことは、王ですら覆せない事実だったのですから。いずれにしても、王はわたくしをいかなる形でも罰しませんでした。

ただ黙って扉を開け　この扉が、その前から少しばかり開いていたのをわたくしは今でも覚えています。つまらないことほどよく覚えているものです　出て行きました。

そして終生、二度と入ってくることはなかったのです。

これが、わたくしの昔話の顛末です。

あれから十九年が経ちました。王が逝き、息子が即位したのが五年前です。たった五年であの子が死んでしまうなんて、戴冠式の堂々とした姿からは想像もできませんでした。幼いころは多少、内気なところがあつたものの、成長するにつれて誰に恥じることもない心身ともに立派な青年になったあの子は、わたくしの全てでした。

だからあの子があつさり神に召された時、これは罰なのだと、どこかで納得したものです。

クリステイーネをあのように貶めたわたくしに、あの子の親である資格はないと、全能なる何かに突きつけられたような気がしたのです。

息子が死んだ後、王を継いだのはクリステイーネの息子でした。クリステイーネに生き写しの、神々しい美貌を持つ若者です。クリステイーネの持ち得なかった権力すら手に入れ、まさに並ぶものなき至高の存在と言えるでしょうが、わたくしはもう憎悪を感じはしませんでした。

理由は二つあります。

一つには、他ならぬ息子が彼を非常に愛していたからです。彼の方も、息子を慕っているように見えました。であれば、その気持ち

だけはわたくしと同じものであるはずです。息子が愛していた相手を、息子を愛していた相手を、心底嫌うことはできません。

そしてもう一つには、あの青年がクリスティーネに酷似しているながらも、内面的には全く似ていなかったからです。

おそらくクリスティーネの両親は、娘の忘れ形見を持て余したか自分たちから栄達の機会を奪った疎ましい対象として見たかしたのでしょうか。出産で弱ったせいで落命したのだと、典医は説明したはずです。残された赤子を憎むとまではいかなくとも、厄介な存在と認識したかもしれません。

事実、わたくしの目に映る彼は、クリスティーネというよりも王やわたくしと同じ種類の人間に見えました。

王弟時代、彼の奔放な振る舞いは時に宮廷で問題になりましたが、わたくしに言わせればあれは一種の病気です。

悪戯心などという可愛いものではなく、単にそれをするることによって周りを試していたにすぎません。傍目にはそう見えなくとも、彼は頭のいい少年でした。反抗したり媚びるよりも効果的に敵味方を判別する方法を、知っていたのです。息子が、一貫して彼を庇い続けていたのも、そのことを察していたからでしょう。

わたくしが自分の観察眼を確かなものと信じたのは、先日、彼と二人きりで話す機会を設けた時のことです。

会見を申し込んできたのは、彼の方でした。

彼は、いつものように微かな笑みを口元に湛え、大股に部屋に入ってきました。そして椅子に優雅に腰掛けると、こう言ったのです。貴女が私の母を殺したそうですね。

「誰に聞いたのです」

「誰だと思えますか」

「ふざけないでちょうだい」

「ふざけているつもりはありませんけどね 兄上ですよ」

心臓が止まるかと思いました。まさかそんな、という思いと、あるいは知っていたかもしれない、という思い、その双方がぶつかり

合つて、結局まともな思考など何一つ浮かんではきませんでした。彼が虚言を吐いている、という考えも一瞬、脳裏をよぎりましたが、息子の死からまもないのにこんな嘘をつくとも思えませんでした。誰を裏切ろうと、彼は息子のことだけは裏切らないでしょう。

わたくしは観念しました。

「ええ、そのとおりね……それで、どうしたいのです。わたくしを裁きたいのですか。貴方ならできるでしょうが」

「裁判、という意味なら、そんなことはしません。貴女は兄上の母親ですからね。不名誉を背負わせるのは忍びないし、兄上も望んではいない」

「では、何が目的ですか。貴方はわたくしを恨んでいるでしょう。だからわざわざ、こんな場を設けたのでしょうか？」

「恨んでいる、というよりも……想像することがあります。貴女が母を殺さなかったら……母が生きていたら、俺が得られたかもしれないものについて」

「何が言いたいのです」

「別に。大体、私が貴女を恨んでいて罵詈雑言の限りを尽くして罵ったとしても、貴女のやったことがなかったことになるわけじゃない。少なくとも、私の中では。そもそも私は貴女を許すつもりはないし、貴女だつて私の許しなんて求めるつもりはないでしょう」

「……」

「貴女にとつての罰は、兄上が貴女の罪を私に告白した、そのことで十分では？」

そのとおりです。

わたくしは息子の前でだけは、綺麗な人間でいたいと思っておりました。それが身勝手な望みだとはわかっていましたが、息子を見る時だけは、本当にわたくしの心中には温かく優しい感情だけがありました。だから知られたくなかった。わたくしがいかに醜く愚かな人間なのか、知られたくはなかったのです。

けれどこれが罰と言ふなら、わたくしは受け取らなければならな

いのでしょうか。

滑稽なものです。

息子は死に、他ならぬクリスティーネの息子が全てを手に入れている。わたくしごときに変えられるものなど、何も無いということでしょうか。分を弁えず、神の寵愛を受けし者を妬んだ報いが、これなのでしょうか。

かつてない疲労感に襲われるわたくしを、彼は黙って眺めていました。

時間にすれば、二、三分でしょうか。その間に何を思い、何を考えたのか、わたくしには見当もつきません。何故あんなことを言い出したのかも　きっと永遠にわかることはないのでしょうか。

「そんなに落ち込むことはありませんよ」

沈黙の後、彼は不気味なほど穏やかにそう言いました。

わたくしは顔を上げました。その穏やかさに内包された何かを、感じ取ったのです。

彼は一見、くつろいだ様子でした。無邪気とさえ言えそうな微笑を湛えて、けれど注意深い者ならば苛立っているのがわかったでしょう。

彼は椅子から立ち上がり、わたくしを見下ろして、言い聞かせるように、こう言いました。

「貴女が思っているほど、兄上は打撃を受けていないかもしれませんよ。兄上だって、そこまで澄み切った人間じゃありませんからね」
今度こそ、わたくしは絶句しました。

息子をあれだけ慕っていた彼が、こんなことを口にするとは思ってもみなかったのです。王位継承権とて、捨てようとしたのをわたくしは知っています。寵愛を得るために媚びていたようには、見えませんでした。内容そのものより、忌々しげなその口調が感情の激しさを表しているようで、余計に混乱を誘われました。彼は行動はともかく、感情の起伏は極めて平坦な人間だと思っていただけに、どうとらえるべきかを測りかねたのです。

「貴方が……貴方が、そんなことを言うのですか。息子をあれだけ敬愛していた貴方が、どうしてそんなことを」

「理由を教える義務があるとでも？」

わたくしの精一杯の言葉を、彼は見事に切って捨てました。

「貴女は考えるべきです。貴女が兄上の何を見ていたか、何を見ていなかったか。知らなくても、いいことなのかもしれませんけどね」

彼の言うことは、わたくしには何一つ理解できませんでした。

訊ねようにも彼はさっさと背を向け、出て行ってしまったのですから。その拒絶を覆すことは、わたくしには無理でした。

それから何度もあの言葉の意味を考えましたが、思い当たることは何もありませんでした。

息子は本当に優しい人間で、彼が突然あのように言い出す理由など一つもないように思えるのです。けれども彼はわたくしに答えを教えるつもりはないでしょう。考えろ、と言っていました。彼は、わたくしを試しているのです。答えに辿りつけるか、否か。それが彼にとってどんな意味を持つのかはわかりませんが。

でも、わたくしは怖いのです。

わたくしの知らない息子を知ることが、とても恐ろしい。

自分のように惨めでつまらない人間だったら、どうすればいいのでしょうか。息子はわたくしの誇りでした。わたくしのような人間からは所詮わたくしのような人間しか生まれないのだと、そう突きつけられて受け入れる自信などありません。

考えたくない。

もう何も、考えたくないのです。

彼と彼女の問答

「やあ、こんにちは」

「……」

「あれ？黙っちゃってどうしたの？」

「……」

「もしかして機嫌悪い？生理？」

「お母様から聞きました。貴方が少女を偏愛する変態であるとは本当ですか」

「酷い言われようだなあ。あんまりはつきり言わないでよ。まあ、本当のことだけだね」

「どういう気持ちなんですか？」

「どういって？」

「貴方の性癖はおそらく小数派であると理解していますが、それについての貴方の考え、もしくは感情に興味があります」

「面白いこと言うねえ、君。なんだってそんなことに興味があるわけ？」

「なぜ……？さあ、わかりません。強いて言えば、性格でしょうか。私は好奇心が強いので」

「ふうん？」

「自分にとって未知のことは、知ってみたいものではありませんか？自分が身をもって体験することは出来なくても、人の体験を聞くことで核心に迫ることはできると思います」

「それを知って、君はどうしたいの？」

「どうもしません。ただ知りたいだけです。貴方の性癖を大っぴらに話したりはしないので安心してください」

「別に僕は構わないけどね。同じ趣味の人以外で僕に興味を持つ人がいるなんて思わなかったから、新鮮だよ」

「そうなんですか？寂しい人生ですね」

「君、可愛い顔して結構きついね。もつとさあ、柔らかく遠まわしに言ってくれないかな。貴族なんでしょ？」

「必要があればそうしますが、貴方はそういう物言いを好まない気がしたので。それに、お母様はああいう方ですから、私も勿体ぶつた言い方は苦手です」

「ああ、あのおばさん。あの人もなかなか面白い人だったよ。流石は君の母親だ」

「……」

「どうかした？」

「いえ。ただお母様を『おばさん』呼ばわりして五体満足でいられるとは思わなかったのだ」

「はは。僕、悪運だけは強いからね。でも、君に手を出したら見逃してはもらえないだろうなあ」

「そうですね。四肢切断の上に猛獣の群れに投げ込むくらいのはずると思います」

「……それは僕に対する牽制で言ってるの？」

「？私は客観的に考えた上で、最もありうる答えを導き出しただけです」

「そ、そうなんだ」

「私は一人娘なので、本来分散されるべき愛情や保護意欲が集中してしまっているでしょう。お父様も、私と言葉を交わした異性の方を全員把握しているふしがあります」

「ふうん。だから君も変なんだね」

「そうかもしれません」

「あ、肯定するんだ……」

「私は、自分自身がおかしいと思うことはしていないつもりですが、それが他の方から見てもおかしくないとまでは言えません」

「なんか真面目だね、君。他人からどう見えてるかなんて、どうだっというじゃないか」

「やはりそういう心構えでないと、自らの信念を貫き通すことはで

きないのですか？」

「信念って言うか、僕の場合はただの趣味だけど。まあ、変態が何を言おうと常識には勝てないからね。真面目に向き合っても馬鹿見るよ」

「そうでしょうか？いえ、貴方の言うことを否定する気はありません。でも興味深いですね……そういう特殊な性癖を持っていたからその結論に至ったのか、そう言い切るような思考回路の持ち主だけが自身の特殊な性癖を受け入れられるのか」

「君の言うことは難しすぎてわからないよ」

「では質問を変えます。自分の性癖を自覚したのはいつですか？」

「そうだねえ、十五、六歳の頃かな？」

「早いですね。今の私と同じくらいですか」

「僕、好きな子がいたんだよねえ。ドロレスっていう、可愛い子。

まあ、身分違いで恋人どころか碌に口も利けなかったんだけど。だから未だにドロレスを探してるのかな……と言っても、女の子と戯れてる時に彼女のことなんて考えないけどね。正直、顔もよく覚えてないし。そう考えると、ドロレスのことは全然関係なくて、ただ単に僕がそういう人間なだけかもしれない」

「そうですか」

「そうですね……僕さあ、今かなり個人的な話したんだけど一言で終わらせられちゃ、僕の立場ないんだけど」

「貴方が言っただけですよ。どうして成人した女性では駄目なのかわからないと。本人がわからないことを私が、まして箱入りの私がわかるわけがありません」

「あ、言っちゃう？自分で言っちゃう？わからないなら考えればいいじゃん。別にどうしてもわかって欲しいってわけじゃないけどさ、わざわざ僕とこうして話してるってことは、理解したいって気持ちがいっぱいあるんじゃない？すぐに正解が欲しいなら、本でも読んでればいいんじゃない？僕は嫌いだけど」

「……そうですね。貴方の言うことにも一理あります」

「君、ほんとに素直だね。悪い人に騙されないか心配だよ。ま、何かあってもあのおばさんが全部粉碎しそうだけど」

「母は、やはり特殊なのでしょうか」

「……逆に訊きたいんだけど、君はあれを普通だと思うの？」

「よくわかりません。物心ついた頃から、極限状態での生き残り方とか人間の急所とか、そういうことばかり教えられていましたから。見本を見せるために訓練場まで連れていかれたこともあります」

「うわあ……」

「最近になって他の家のことを知るにつれて、もっとやらなければいけないことがあるのではないかとも思うのですが……そのことをお母様に言ったら『よそはよそ、うちのうちだ』と一言で片づけられてしまつて」

「凄いなえ。お父さんは何も言わないの？」

「父も軍人なので。元は画家志望だったんですが、隣国の著名な美術学校に落ちて夢を断たれたことが悔しくて軍人になったそうです。いつか併合してやるとか言っていました。あわよくば私にその志を継がせたいようですね」

「君はその気あるの？」

「まさか。私は学者になりたいんです。ただ、軍人ならともかく学者なんてお母様が許さないかもしれませんが」

「必要なら僕が弱味の一つ二つ探ろうか？」

「そんなことが出来るんですか？」

「それが僕の仕事だからね。あのおばさんじゃ大した汚点は出てこないかもしれないけど、ないならそれで作ればいいし。僕は嘘つくのも得意だからね」

「……今はいいです」

「そう？遠慮しなくてもいいよ？」

「お母様が認めざるを得ないくらい、私が優秀な成績を出せばいいだけのことです。それに、人に頼らなければ学者になれないなんて認めたくありません」

「へーえ、言うねえ。精々頑張つて」

「ありがとうございます」

「……」

「貴方はどうしてその仕事をしているんですか？」

「僕？ たまたまかな。僕を二番目に拾った奴が、そういう仕事を僕に仕込んだんだよ」

「二番目？」

「そう、二番目。僕、孤児だったんだ。最初の奴はかなりの変態で、まあ今の僕が言えたことじゃないけど、小さい男の子が好きだったみたいだよ。毎晩毎晩、僕のこと膝に乗せて絵本広げて、可愛いね可愛いねっていろいろするわけ。子供心にも死んでくれないかなって思ってたらほんとに死んじゃった。だから二番目」

「……」

「どうしたの？」

「そんなことを私に話しても平気なんですか？」

「あんな奴に、僕の何かを少しでも変えられたなんて思いたくないからね。実際はどうか知らないけどさ。それに、今の仕事で僕はあの意味復讐してるからいいんだよ」

「復讐？」

「さっき言ったじゃん。人の秘密を探ったりでつち上げたり、そういうのが僕の仕事だって。表では虫も殺せませんって顔してる奴が裏ではえげつないなんてよくあることだよ。そういう連中の澄ました仮面を剥いでやるのがたまらなく楽しいんだよねえ」

「それと復讐とどういう関係が？」

「僕に悪戯した男も、社会的には模範的な人間だったんだよ。孤児の僕なんかを引き取って育ててやってる人格者、って近所の人には評判だった。だから僕は、あいつみたいに金も地位もある善人を見ると無性に苛々する。裏の裏まで調べつくしてやらないと、気が済まない。そうやって手に入れた秘密を有効活用するのは、僕じゃないって雇い主だけど、でも『知っている』って気分いいじゃん。その

気になりさえすれば、連中の何もかもを僕が潰せるっていうのはさ」

「……そうですか」

「心配しなくても、君や君の家族に何かする気はないよ。今はね」

「今は？」

「ああ、言葉のあやだよ。僕は一応、この国の王様に雇われているわけだし、王様に頼まれたならともかく、何も無いのにちよっかい出してあのおばさんに恨まれるのは割に合わない。それにあのおばさんも君も、別に善人じゃないしね」

「そんなこと言われても、嬉しくありません」

「だろうね。褒めてるわけじゃないし」

「……」

「怒った？」

「楽しそうに訊かないでください」

「頬が赤くなってる。そういう顔されるとぞくぞくしちゃうよね」

「っ触らないで、ください」

「この程度でそんなにびくびくしなくてもいいでしょ。流石お嬢様」

「……帰ります」

「あれ、帰るんだ？じゃあさ、王様の秘密を教えてあげるよって言ったら、どうする？」

「どうもしません。貴方が知っていることが事実だとしても、それが真実だとは限りませんから」

「口の達者な子だね。わかったよ。帰れば？また気が向いたら来てよ」

「おかしいことをしないと約束してくれますか？」

「どうだろうねえ」

「……」

「ところで、まだ聞いてなかったね。君、名前は？」

「アンゲリカ。アンゲリカ・フォン・ベルハウゼンです」

「アンゲリカ？ということは、愛称はゲリかな。僕はヴラジミール・ハンバート。偽名だけどね。これからよろしく、ゲリ」

ある国王の結婚

私、ダイアナ・アウスタリアは人生で最も重大なイベントを迎えようとしている。

何を隠そう、結婚するのだ。

お相手はそこそこ大きくてそこそこ発展している国バルトライヤの、今をときめく国王とか。まあ、悪い話ではない。父上や爺やが口を揃えて褒めちぎっていたのは当然としても、風聞から判断しても国王はそれなりに有能らしいし、バルトライヤとの関係を強化しておくにこしたことはない。飛びつくべきお話だ。しかも申し出てきたのはあちらの方から、らしい。

物好きな連中もいたものだ。

私の噂を知らないわけもないだろうに。知っていたら知っていたで、なぜ私をご指名なのか興味深いところなのだが。

「聞いているのですか、姫様！」

上の空になっていたのを気づかれたのか、爺やが凄まじい形相で雷を落とす。

私は適当に頷いておいた。本当は耳を塞いで退散したいが、生憎と馬車に閉じ込められている現在の状況下では無理な相談だ。まったく、私の見合いになぜ爺やがついてくるのか。先日、私よりも孫娘を結婚させてやれと言った時は何か感動していたくせに、結局ついてきた。これはきつと父上の大いなる意志が関係しているに違いない。揃いも揃って、説教が長い所と同じ話を何度も繰り返す所はそっくりだ。現に、今も目の前で三度目か四度目かわからないバルトライヤ国王礼賛が続いている。

曰く、容姿端麗、頭脳明晰、文武両道、博学多才と、一体この超人かと言いたくなるほどの褒めっぷりだ。

「お前が結婚すればいいんじゃないか？」

「何を仰います！」

つい口に出してしまつたせいで噛みつかれる。本当に噛みつかれた方がましだ、と思い、爺やが私に狂犬よろしく噛みついてくる図を想像したら笑つてしまつた。

「笑つておられる場合ではありませんぞ！何としてでもこの話をものにしなければ、姫様の明日はありません」

「何？私はお先真つ暗なのか？」

「何を驚いているのですか！よいですか、殿下はもうすぐ二十一歳。これは王族としては売れ残りもいいところですよ！修道院行きも考えねばならないかもしれません。それでもいいのですか！？」

「よくはないなあ、うん」

「そうでしょうとも！殿下のように飽きつぱくて我儘な方が、あの生活に耐えられるとは思えませんからな！むしろ修道院の方が迷惑です」

「お前、それは酷くないか？」

「酷いものです。陛下も言っていましたぞ。あのじゃじゃ馬を押しつけられる国はとんだ災難だ、と」

押しつけようとしている張本人が、よく言う。

じゃじゃ馬と言われようと私の心にさざ波ひとつ立つことはないが、それが相手の耳に入ったら婚約は即取り消しになるだろう。世の殿方はおしとやかで従順な女性を好むものだ。現に、最初の婚約が相手の病死で壊れて以来、私と一生を共にしようと申し出てくる王族はほとんどいない。

確かに、趣味が狩りと乗馬、おまけに見合いの場に男装で臨んだりしたら遠慮されても無理はないが、夫となる相手に素の私を知ってもらおうと考えてのことだ。私はそれほど器用な方ではないし、その場だけ取り繕つて結婚したとしても破綻するのは目に見えている。

大体、性格や嗜好も知らない他国の女をはいはい懐に入れることに、不安を抱かないのだろうか？

まあ、その辺りは私が口を出すことではないが　私の恰好を見ても可笑しそうに笑ってくれたのは、一人だけだったわけだし。

「どんな方なんだろうな……」

バルトライヤ国王は、と続けようとした私の呟きは、爺やの喚き声に遮られた。今までの熱弁を全く聞いていなかったことがばれたらしい。

そして再び繰り返される長つたらしい説教は、目的地に到着するまで私を辟易させるのだった。

そんなわけで、バルトライヤに着く頃には私は疲労困憊だった。

王宮の入り口まで出迎えに現れたのはいかにも切れ者といった印象の細長い男で、肩書は宰相補佐であるらしい。宰相が病床にあるとかで、非礼を詫びる生真面目な様子は爺やと似たものを感じさせた。もしこの国に嫁いたら、こういう男が爺やのように口うるさくなるのかと思うと憂鬱だが、それは脇に置いておく。

「お気になさらず。お身体を大事にと、伝えておいてもらえますか？」

できるだけ、深窓の姫君っぽく見えるように振る舞ってみる。

見たか、爺や。私だって猫ぐらい被れる。

「……して、国王陛下はどちらに？」

私を華麗に無視した爺やの興味は、噂でしか知らない若き国王にあるらしい。

なぜかその問いに宰相補佐　フレイザー卿は、顔を引き攣らせた。

「へ、陛下は少々政務が立て込んでおりまして……申し訳ありませんが、先にお部屋の方にご案内を」

「ようこそいらっしやい……」

フレイザー卿を遮るように、誰かが勢いよく抱きついてきた。

その人物に私は不覚にも見惚れてしまった。一言で表現するならば、そう、「きらきらした人」とでも言えはいいだろうか。驚くほどに美しい女性だった。目鼻立ちがはつきりしている割にくどくない顔立ちに、金髪が生き物のように波打っているかの人は、神話の世界の住人にも思えた。

つい「負けたな…」と呟く私に、彼女はきよとした後、得意気に高笑いした。

「ほほほ、私の美貌はアウスタリアの姫君さえも魅了してしまうのね。罪な女だわ」

「あの、貴女は一体」

「あら、御免なさい。私はこの国の王です。ルシアと呼んで頂戴」
「は？」

「バルトライヤ国王は男性の筈では？」

私の疑問を爺やが代わりに口にする。自称バルトライヤ国王は、うつとりするような微笑を浮かべて私の手を握り締めた。

「確かに私の生まれた時の性は男だけれど、それで美しく着飾ることを諦めるべきではないわ。性別とは個人を引き立てる素養であって、個性を殺すものであつてはならないと思うの。姫君もそう思わなくて？」

微笑んではいるが、やけに目が真剣だ。そんなにこの問いは彼女、いや彼にとつて重要なものなのだろうか？とはいえ彼の言うことには私の考えと通じるものがあつたので、私はしっかりと頷く。

「そのとおりですね。性別を理由にして、趣味をやめさせようとする権利など誰にもないと思います」

「あら、貴女も苦勞したのね。噂は聞いているわ。アウスタリアの姫君は男の恰好を好む変わり者だつて」

「貴方こそ、そこまで女装を極めている時点で相当変人では？でも凄いですね。私の国には貴方がそんな趣味をお持ちだなんて噂は全く聞こえてこなかったのに」

「私は何も隠しているつもりはないのだけれどね」

「そのお陰で臣下は苦労します」

苦虫を噛み潰したように言ったのはフレイザー卿だった。なぜか隣で爺やが深く頷いている。何を通じ合っているんだ、お前たち。

「まあ、意気投合されたのはいいことです。陛下、ダイアナ殿下を部屋までご案内して差し上げて下さい。私はこの方といろいろとお話ししなければならぬので」

と言つて、爺やを見やる。

「別に構わなくなつてよ。そうだ、疲れていなければ庭園まで一緒にしない？珍しい花が見られるわ」

「喜んで」

私は素直な笑顔を返した。

普通、とはいいがたい恰好ながらやけに堂々としているこの人を見てみると、何だか楽しくなつてきたのだ。

庭園は本当に素晴らしかった。

ありとあらゆる花が豪快に、けれど華麗に咲き誇る様は壮観の一言だった。思わず歓声を上げた私に、陛下はとても嬉しそうな顔をした。笑つてはいなかったけれど、そんな気がしたのだ。

「兄上がとも花の好きな方だったから、今でもまめに手入れをさせているの」

「先代にはお会いしたことがあります」

「兄上に？」

「ええ。私が十四の時に、一度だけ。何を隠そう、婚約者候補として」

「婚約？兄上と、貴女が？」

意外そうな顔だ。確かに、あの時の私は今に輪をかけて落ち着きもなく、とても誰かの伴侶となれる人間ではなかった。無理やり飾り立てられ、服に着られたようになって不機嫌だった私と、対等に

話してくれたことを覚えている。子供扱いされることが面白くなかった私にとつて、その反応は新鮮だった。弓矢で獲物を狙っている時の緊張感が好きだとか、女物の衣装は動きづらくて嫌いだとか言つても、眉を顰めたりお説教しないのが嬉しかった。

「『君はこれからもつと綺麗になつていくだろうから、羨ましい』と言われました。『その頃には私はおじさんだ』つて」

おじさんじゃない！と私は癩癩をおこしたのだ。おじさんでも結婚するもん！と。

二年後に彼が病死しなければ、本当に式を挙げていただろう。私が子供を産める体になるまでは婚約者という関係に留まっていたが、少なくとも父上は乗り気だった。

彼が亡くなつた時はとても落ち込んだ。そして誓つたのだ。彼のような人でなければ結婚しない、と。

「じゃあ貴女がお見合いを何度もぶち壊しているのは、兄上のせいなの？」

「せい、つて……。まあ、そうです。私は理想が高いのですよ、陛下」

「そのようね」

「貴方はどうなんですか？」

「どうつて？」

「どうして女装なんてしているんですか？」

陛下は意表を突かれたようだった。初めてされる質問とも思えないが。

「……あら、言うまでもないことよ。私は着飾るのが好きなの。趣味よ、趣味」

「そうでしょうか」

「そうよ。貴女こそ、どうしてそんなに疑うの？」

「女の勘です」

「……」

「さつき言いましたよね。『隠しているつもりはない』つて。ただの趣味なら、普通は隠すと思つんです。知られれば知られるほど、

周りからうるさく言われるに決まっているんですから。だから貴方にとって、女装するってことには何か意味があるんじゃないですか？」

あつて欲しい、という願望も少しある。

あの『彼』の弟が何を考えて女装をしているのか、知りたいと思つた。

「貴方が私を信用できない、と言うならそれでも構いません。でも私は貴方がどういう人間なのか、知りたいんです。だから私が王族として非常識な振る舞いをしていた理由をお話しました。貴方にもできれば正直になつてもらいたいんです。口に出さなければ、お互いに理解なんてできるわけがありませんから」

突然、陛下が笑い出した。

面食らう私に、「失礼」と陛下は息も絶え絶えに断る。

「どうして兄上が貴女を可愛がつたのか、わかつた気がした」

「は？」

「貴女は自分を恥じていない。それが羨ましかったんだ」

「？」

勝手に納得されても、私には意味がわからない。私にもわかるように説明してくれないものだろうか。その気持ちを察していないわけもないのに、陛下はゆつたりと腕など組んで首を傾げる。

「私のこの姿には、意味があると言えばある。上手く説明できないが、そう　罪滅ぼし、かな」

「罪滅ぼし？」

失礼ながら、そんな殊勝な性格には見えないが。というか、なぜ女装が罪滅ぼしになるのか。

私の顔を見て、陛下は可笑しそうに目を細めた。唐突に、ああ似ているな、と感じた。『彼』もこんな顔で私を見下ろしていたことがある。顔のつくりは全く違つのに、初めて彼らが兄弟だと実感した。

「それは誰に対する罪滅ぼしですか」

わかるような気がしたが、敢えて訊ねた。陛下は苦笑する。

「それは訊かないでくれ。相手はもうとつくの昔に私を許していて、私が勝手に思い悩んでいるだけだから　いや、許されたからこそ、かな。私は捻くれているから、『気にしなくていい』と言われても額面どおりに受け取れない。『もういい』と突き放されたように感じる。だからこういう恰好をして、『非常識』だの『変人』だの『気持ちが悪い』だの言われれば、少しは相手のことが理解できるかと思った……と言っても、何のことかわからないか」

「よくわかりませんが……貴方がとてもその人のことを好きなのは伝わりました。嬉しいです」

「嬉しい？」

「私もその方が大好きですから。同士が見つかって嬉しいです」

そう言つと、陛下は本当に嬉しそうに笑った。

「ありがとう」

告白

これを読む時、お前はどんな顔をしているのだろう。

悲しそうな顔だろうか、それとも嫌悪や軽蔑に満ちた顔だろうか。そもそもこの手紙を受け取ることも拒むかもしれないな。いや、すまない。お前を責めたいわけではないんだ。おかしいのは私だということとは重々承知しているし、自分で隠し続けておいて理解されないことを嘆くのは筋違いというものだろう。

……駄目だな。覚悟を決めたつもりだったのに、上手く言葉が出てこない。

お前に見られたことについて弁解するつもりはない。私はドレスを着ようとしていた。そこにお前が入って来た。それだけのことだ。

なぜ？

ただ、着てみたかったからだ。ずっと着てみたいと思っていた。

貴族の令嬢達が衣装や装飾品に金をかけるのは無駄遣いだと、お前は言っていたことがあるな。私はそうは思わない。私はずっと羨ましかったんだ。誰憚ることなく着飾ることが許される彼女達が、とても羨ましかった。

女性の格好をしたかった、というのはきっと正確ではない。

私は女性になりたかったんだ。

理解できないか？あの時のお前はそういう顔をしていた。これが手紙で良かったよ。目の前にいたら、きっとお互いに辛かっただろう。責めたいわけじゃない。でも、最期まで否定されたら、と思うとお前と直接話す勇気がどうしても出てこなかった。

私は臆病だ。

思えば幼いころから、自分がどうあるべきか、ということについて人一倍敏感な子供だった。私は王太子だし、いずれは王になるべき立場で、だからあらゆることを上手くこなさなければならぬ、

周囲の期待に応えなければならぬと誰に言われるでなく察していたと思う。だから物心ついてからずっと抱えていた違和感も、私にとっては罪でしかなかった。

最初にそれを自覚したのは、五歳の時だったと思う。

母上に絵本を読んでもらっていた時だ。内容自体はよくあるもので、悪党にさらわれたお姫様を勇者が助けに行く冒険譚だった。普通と違うといえば、お姫様は結局、勇者に助けられる前に病気で死んでしまったのだが、当時の私は思ったものだよ。何て可哀想なんだろう、と。好きな人に会う前に一人きりで死ななくてはならないなんて、何て可哀想なんだろう、と。

わかるか？

私はお姫様のほうに感情移入していたんだ。

男なのに、勇者にはこれっぽっちも興味がなかった。「勇者様のように勇敢な男の子になれるといいわね」と母上に言われて、困惑したことを覚えているよ。

その時は、まだその程度のもだった。男だからと言って、必ずしも勇者に憧れるというわけでもない。

だけど成長するにつれ、私の感じる違和感はどんどん強くなっていった。

王として、心技体の全てが周囲より優れていなければならない。その考えは理解できたし、重荷ではあったが不満を持ったことはない。だけど剣を持たされて、叩かれ、怒鳴られ、「男子たるものこの程度で弱音を吐いてはなりません！」と言われるのだけは、耐え難かった。

それがおそらく、私が初めて「男」という性に恐怖感を抱いた時だろう。

教官が怖い、という感覚とは違う。ただ何となく、教官に言われた「男子たるもの」のあるべき姿と、私自身が重なることはないだろうということを漠然と感じ取っていて、それが得体の知れない恐怖感となっていたのだと思う。

私にそこそこの剣才が備わっていて、本当によかったと思うよ。
でなければ、もっと早く破綻が訪れていただろう。

成長期になって、体がはつきりと男の特徴を現してくると私の意識もはつきりと苦痛を感じるようになった。

日ごとに伸びていく身長。しつかりとした肩幅。太い腕や腿。その全てが私は嫌で嫌でたまらなかった。男として見れば、堂々として立派な体格を持つことは、むしろ自信になるはずだ。でも、私が考えたことと言えば、どうやってこの体を周囲から隠すか、ということだった。

勿論、隠すなんて甚だ非現実的な話だ。

王太子である私は常に人目に晒されていたし、晒されても涼しい顔で堂々と立ち居振る舞うことが求められていた。味方の振りをし隙を窺う、毒蛇共に対して見た目の面でも侮られるわけにはいかなかったから、武人らしい私の外見は武器にもなった。

隠すどころか利用するべきものだ、私の体は。

その実、誰にも見られたくない、こんな体は気持ち悪い、と今にも叫び出したくなる衝動は、常に私の中にあつた。

口にはしてはいけない感情だとわかつていた。口にしたところで、どうなると言うのだろう。周囲にどうして欲しいのか、私自身がどうしたいのか、そんなこともわからないのに、こんなわけのわからない鬱屈で自分以外の人間を悩ませることに、何の意味があるというのか。

わかつていた。私が我慢すればいいことは。それが、この上ない自己否定であつたとしても。

「王」という仮面が用意されていたのは、私にとって都合がよかったよ。「男」としての自分よりも「王」としての自分の方が、演じるには幾分楽な役割だった。

私は王として、出来る限りのことをしたつもりだ。至らぬこともあつたが、全身全霊を傾けて国をよくしようと努力した。今に思えば、私人としてけして満たされない自分自身を、せめて公人と

しては満足させようとしていたのかもしれない。差し迫った事柄があるわけでもないのに、常に焦燥は私と隣合わせだった。

一番、辛かったのは「恋」を自覚した時だ。

相手は外遊に来ていた某国の王子だった。無口な方だったが、根は優しい人だったと思う。バルトライヤに在る間は、年が近いこともあって私が案内を務めることも多かった。彼に会える日は、自分でも驚くほど心が弾んだものだ。それが気の合う友人に対する友情ではなく、異性として意識してのことだと気付いたのは、彼が帰国して、結婚式の招待状が届いてからのことだったけれど。

あの時ほど、自分を嫌悪したことはない。

笑顔で彼を祝福する私は、周りからは当たり前前の姿に見えていただろうが、本人にしてみれば滑稽の一言だった。友人の祝い事を心の底から喜べないばかりか、花嫁に嫉妬すらしていたのだ。私が彼女のように可憐で守りがいのある姿かたちをしていたら、彼は私のものだったのに、と。考えるだけでも馬鹿馬鹿しい話だろう？ 肉体を取り換えることはできないし、こんな私に好意を寄せられても彼は迷惑なだけだろう。

それでも私は落ち込んだし、決定的に自分のことを嫌いになった。何故、私はこんなおぞましい体を持って生まれてしまったのだろう。家臣や民が私を素晴らしい為政者と称えても、私は自分の体も魂も何一つ好きになれはしない。それでいて、往生際も悪く、誰かに自分を認めて欲しい、必要として欲しいと願ってもいる。本当にどうしようもない人間だ。長年の習慣で、表面を取り繕うことだけは出来たのは幸いだった。

ルシアス、お前は信じないかもしれないが、私はお前に救われていたよ。

周りの者たちはしばしば私がお前に甘すぎると思っていたようだ。一応、自覚はしていた。お前は私に「国王」も「男性」も求めない、唯一の人間だった。では何を求めていたのかと言われると、はつきりとは答えられないのだが……少なくともそれは私の求めていたも

のと極めて近かったのだと、そういう気がする。だから私は自分を愛するようにお前を愛することができた。自分が得られないものを与えてお前を満たすことで、私自身も幸福を感じることができた。……この流れで頼むのは卑怯かもしれないが、母上を許してやって欲しい。

前に言った通り、私の記憶は曖昧だ。聞いた当時は、何のことかもわからなかった。本気で探せば証拠を見つけることもできただろうが、私にはできなかった。あの人は、哀れな人だ。突き放して正論で叩き潰すのは、せめて私以外の者に委ねたかった。

無論、お前には母上を裁く権利がある。

父上がお前を顧みなかったのも、母上がクリスティーネを妬んだのも、祖父母がお前を疎んじたのも何一つお前の責任ではない。

クリスティーネが生きていたら、お前はもつとたくさんのもものを得られただろう。

だから、私は頼むことしかできないし、お前が母上を処刑したとしても恨みはしない。本当だ。

そして最後にこれだけは言っておきたい。

私はお前を許すよ。

お前は優しい子だ。少なくとも、私にとっては。こういう形で別れを告げてしまえば、お前は自分を責めるかもしれない。お前には、そんなことで心煩わせて欲しくはない。あんな現場を見ればお前がああいうことを口にするのは当然だし、いつかこうなることはわかっていた。

不思議なことに、今はとても穏やかな気持ちだ。

何を恐れることも思い悩むこともなく、本当に心安らかにあれている。

私はやっと自由になれるのだ。

だからお前が悔いることなど、一つもない。

できれば 祝福して欲しい。私の自由を。私の死を。

そして忘れないで欲しい。

私が賢王でも良い兄でもなく、ちっぽけな人間であったことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286j/>

ある国王の女装趣味に対する一考察

2010年10月8日14時10分発行